
かごめかごめかごのなかのマヒロ

冴木 昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かごめかごめかこのなかのマヒロ

【Nコード】

N3047BA

【作者名】

冴木 昴

【あらすじ】

桃井カズマは容姿に自信ありの高校二年生。人のモノを欲しがる悪癖の持ち主。

カズマは夏休み明けに名前の変わったクラスメイトにふと目を留める。小柄で大人しいその女子生徒マヒロは、結婚して苗字が変わっていた。その日から急にマヒロが気になりはじめたカズマは・・・

クラスメイト

かごめかごめ かごの中の鳥は
いついつ出やる 夜明けの晩に
鶴と亀がすべった 後ろの正面 誰？

高二の夏休み、素肌を小麦色に染めて開放的な気分を満喫した若者たちは、休暇の終わりと共に定期試験一色に染まる。それは、ぎらつく太陽からのがれて木陰に飛び込んだ者が、陽光の残像に目を射られて立ちつくすときの戸惑いに似ている。そんな夏休み明けの初日、新しい学級名簿が配られた。

「誰か、抜けた？」

隣の席の男子生徒の言葉に、桃井カズマは配られた名簿をつまらなそうに眺めた。ざっと目を通し終え、次いでクラスを見渡しながらつぶやく。

「……変わってねーじゃん」

授業はまだ始まってもないというのに、三十八人の疲れきった顔が同じように物憂げな色を湛えて並ぶ。秋には修学旅行が控えているし、部活だってまだ引退の時期ではないのに、まるで、この先の高校生活はもうなんの楽しみもない、と言いたげに。

ポケットで携帯がメールを受信した。バイブにしていなかったため、EXILEの着うたが教室中に響いてしまった。カズマは、迷惑そうな担任と呆れたようなクラスメイトたちの視線を受けてわざと「ははは」とバカみたいな笑いでごまかしながらフリップを開く。《名前、変わったんだって》

——誰が？ 親の離婚か？

片手で素早く返信すると、親友のリクから速攻でまた情報が寄せられた。

《結婚だってさ》

——再婚だろ？ 正しい日本語使え

カズマは廊下側の一番後ろの自席から、ちょうど対角線に目を向けた。窓際の一歩前に、リクの坊主頭がゆれている。剃りたてほやほやの青坊主は、典型的な野球部を物語っている。夏休み中に頑張つて少しは伸びたと喜んで茶髪に染めたのがいけなかったのだろう。先輩からダメ出しを喰らつて、スキンヘッドにされてしまったのだ。再び携帯が受信したメールを見て、カズマの眉根が寄せられた。《親じゃなくて、本人が結婚したんだよ。お前の斜め前のヤツ。――

――三井マヒロ》

カズマは険しい顔のまま、斜め前の女子生徒に視線を向けた。シヤギーにした柔らかそうな髪の間から白いうなじが覗いている。カズマは同じクラスになって、今初めてその女子生徒、三井マヒロに目を向けていた。小柄で大人しいその女子生徒は、今の今まで完全にカズマの視界に入っていないながらドロップアウトしていた存在だった。集合写真に写っていても半年もすると名前を忘れてしまうような、そんな影の薄い女子生徒。それが三井マヒロだ。

もう一度配られた名簿に目を落とす。

——北斗マヒロ。

それが彼女の新しい名前だった。細い首のラインを目で追つて、心の中で名前をつぶやいた時、ふいに彼女が振り返った。

バッチリ目が合ってしまった、カズマは携帯を取り落としていた。

初めてマトモに見たマヒロの顔から目が離せなくなっていることに気づき、戸惑いを覚える。

マヒロは小首をかしげた。カズマの片手で覆うことが出来そうな小顔は、陶磁器人形ようになめらかで白い。彼の目線は桜の花びらのような唇に向けられ、ついで小さな鼻へ。全体的に何もかもがちっちゃいのに、黒目がちの双眸だけが大きくて、小動物のように潤んでいる。同じクラスになってすでに半年、一度も席替えせずこれほど近くに居ながら、どうしてこんな可愛い子をスルーしていたのかと、自分自身が情けなくなる。

マヒロはカズマの顔へ、次に落ちた携帯に目を向け、ゆっくりとした仕草で拾い上げた。細い指先が黒い携帯を握り、すっと差し出す。その薬指に、銀の指輪が光っている。

カズマの心臓が大きく打った。この小柄な少女は人妻なのだ。

——人妻。その響き自体に興奮する。

なかなか受け取るうとしないので、マヒロは無言でカズマの机に携帯をのせるとすぐに前を向いた。

前方のドアを開けて担任が出て行った。いつの間にかホームルームが終わったようだった。ようやく動悸がおさまり、カズマは斜め前のマヒロに向かって小声で礼を言った。

「サ、サンキュー」

マヒロは肩越しにカズマを振り返ると、花のように微笑んだ。灰色一色かと思われた教室内に、突然淡い光が灯ったような気がした。その日を境に、カズマは斜め前の小柄な少女の行動を目で追うようになっていた。

昼休み、机をくつつけあって弁当を食べる女子の集団の端っこで、ときおりはにかむように笑うマヒロに、視線が吸い寄せられる。

アイツは人妻なんだ……

まるで別の生き物のような気がする。でも、それはエイリアン的な意味あいではなく、山間に立ちこめる白い霧のようで、もっと神秘的な、つかみどころのないモノ。そんな目で見るせいか、マヒロは他の女子と違ってどこか夢げだ。

「新妻が気になるの？ 男ってヤラシー」

振り向くと、購買で買ったパンを抱えたユキノがニヤニヤ笑っている。ユキノはカズマと同じ陸上部に所属している。

「べつに、気にしてねえよ」

言ったそばから箸を取り落としてしまった。ユキノはクスクス笑って、そっとカズマに耳打ちする。

「マヒロ、玉の輿らしいね」

「はあ？」

「だからア、ダンナが金持ちってこと」

カズマは、視線を真横のユキノから正面に見えるマヒロに移した。一七歳の女子高生と結婚するなんて、ただのロリコンおやじに違いない。カズマの脳裏にでっぷり肥って脂汗をにじませる中年オヤジの姿が浮かぶ。その隣にマヒロの可憐な姿を置いてみる……

「げふっ！ 急にげっぶが出た。さっき食べた弁当のおかずの卵焼きがこみあげてくる。」

「んもう、汚いなあ」

ユキノは細く描いた眉をひそめて、さつと二歩下がった。そのまま立ち去ろうとするので、カズマはユキノの手首をつかまえた。

「ダンナって、どんなヤツ？ 中年なのか？」

するとユキノは不機嫌そうにふんと鼻を鳴らして言った。

「なんで私に聞くの？」

「え、だってクラスメイトだろ？」

「クラスメイトだったって、親しくないし」

ユキノのちよつと尖ったものの言いを聞きながら、カズマはマヒロがそつと席を立つのを見つめる。他の女子はまだ弁当を食べながら雑談の真つ最中だが、マヒロは椅子を持って自席に戻りこちらに背中を向けて座ると、本を取り出して読み始めた。隣を向くとユキノもマヒロを目で追っている。

「もしかして、アイツ、いじめられてんの？」

なんとなく気になって問いかけると、ユキノはマヒロの背中にしられたような目を向けて言った。

「いじめなんて、無いよ。だって、あの子ゼンゼン無害だし。……てゆうか、存在感ゼロだしね。……結婚したっていうのだって、マリカのお母さんがあの子の母親から聞いてきたんだよ。未だに結婚式の写真すら見せてくれないし。だいたい、結婚式にクラスの子を誰も呼ばないなんて、なんかやな感じだよ」

ユキノは不愉快そうな表情を隠しもしない。まあ、確かに式を挙げたのなら、写真くらい見せてくれてもいいだろう。ユキノが膨れ

るのももつともだと思う。でも、本人のいないところであんまり悪く言うのはフェアじゃない気がして、カズマはそれとなくマヒロを庇うように言った。

「じゃあ、クラスでお祝いでもしてやる？」

カズマの言葉に、ユキノは目を丸くした。

「冗談でしょう！ 本人から報告もないのに、なんでそんなことするわけ？」

「え、そういうモノなの？」

「そういうモノよ。それに、あたしたちが何度マヒロに新婚生活のことたずねても、あの子まったく話そうとしないんだから。それどころか、まるで苦行僧みたいな顔するのよ。普通、新婚さんって言ったら幸せのオーラ、出てるもんでしょう？ なんてあんな顔するかな？」

ユキノの言葉には、ますます棘が増えてゆく。

照れてるだけじゃねーの？ と言おうとしたがやめた。代わりに「ふーん」といかにも気の無い素振りを装ってみると、ユキノはふつと口元に笑みを浮かべて、女子特有の含みのある言い方をした。「だけどさ、新婚生活って実際どうなのかしらね。マヒロって大人しそうな顔してるわりにはすすんでるっていうか……ねっ。そう思わない？」

カズマは急に不愉快な気持ちになった。確かにユキノは「マヒロとは親しくない」とハッキリ言ったが、嫌っているわけでもないのに中傷めいた事をさらっと言えてしまうのが、何だかとても恐ろしい気がする。女という生き物に対する怖れ。何を考えているのかわからないモノへの畏怖の念とでもいうのか。

問いかけを無視されたせいだろうか、ユキノは声のトーンを落とした。

「そんなにマヒロのことが知りたければ、放課後あとをつけたらいじゃない」

吐き捨てるように言って立ち去るユキノの背中で、長い茶髪が揺

れていた。

——あとをつけたらいいじゃない

その日の放課後、部活に遅れるのを覚悟でカズマはマヒロのあとをつけた。革靴に履き替えて昇降口を出ると、マヒロはいきなり走り出した。カズマは慌てて上履きのまま彼女の後を追った。

校門の前に停まっている黒塗りの車が目に入り、カズマは速度を落とした。マヒロは息を切らして自動で開いた後部シートに滑り込んだ。ドアが閉まり、ゆっくりと動き出した車の後部ガラスからマヒロの小さな横顔がチラリと見えた。

お迎えつき……？

去ってゆく車を見つめながら、カズマは校門の手前で呆然と立ち尽くした。

遅れて参加した部活では部長の虫の居所が悪かったため、カズマだけに居残り練習が課せられた。

ふて腐れながらたった一人で夕焼けのグラウンドをだらだらとランニングしていると、練習を終えた野球部の連中が合流してきた。

「カズマくん、一人で居残りかよ。淋しいねえ」

リクが走るカズマの背中にジャンプでしがみついた。カズマはリクを支えきれず、べしゃつと惨めに転んだ。

「やめろよ！ このボケえ！」

すりむいた膝頭を押さえながら、リクの青い坊主頭を思いっきりグウで殴りつける。リクはカズマの耳元で囁いた。

「ウワサになってるよ、カズマ。あのヒトにちよっかい出してるってホントかよ」

リクの目線の先、体育倉庫のかげにすりりとした女子生徒がいる。陸上部のアイドルでマネージャーの大橋キヨコ嬢だ。カズマより一学年上の三年生で、陸上部の部長・水村と付き合っていることは、学校中の公認だった。

「だから部長はオレにこんな仕打ちを……」

「他人のものを欲しがるクセ、そろそろ直したほうがいいよ。じゃないと、地獄に堕ちるぜっ！」

リクは右手の中指を一本立て、「ファック！」を連呼しながらげらげらと下品に笑った。こんなことが楽しくってしょうがないといわんばかりの笑い声に、カズマもつられて笑う。

他の野球部メンバーと共に引き揚げて行くリクの背中を見送り、一人になったカズマは、ランニングのピッチを上げた。「練習するからには、マジメにやろう」という気持ちで遠目からでも良くわかるような、気合の入った動きでトラックを一気に四周すると、カズマはわざとらしく倒れこむようにゴール付近に転がった。

大きく胸を喘がせて真っ赤な空をみつめながら横になっていると、期待通りに大橋キヨコの長い影が差した。

「誰も見てないのに。けっこうマジメにやってるんだね」
スラリと細い足がシルエットになっている。

「キヨッコ先輩、パンツ見えそーですよ」
ニヤニヤしながら言うのと、パサリと顔の上にタオルが降ってきてカズマの目をふさいだ。

タオルから染み出る甘い香りを胸いっぱい吸い込んで、わざと大儀そうに身を起こす。

「いいんですか？ オレとしゃべってるの、部長に見つかったら困るんじゃないの？」

「心配ないわ。すでにケンカ中なんだから、この上さらに怒らせたって、同じ事よ」

「当たられるオレの身にもなってくれよ」
やれやれと言いたげな表情でタオルを投げ返したカズマの手を取って、キヨコはカズマを引き起こした。

秋色のオレンジに染まったキヨコの顔は、妙に艶めいて見える。形の良い口元が、魅惑的な言葉をささやいた。

「水村クンとは、最近意見が合わないのよね。それに彼、嫉妬深いし……。私、カズマのほうが、好みかも」

綺麗だけど、軽い女。

心の中のつぶやきは露ほども見せず、カズマは驚いたフリをして見せた。男なら誰でも自分の言葉に一喜一憂すると思っ込んでいる、高慢な、それでいて少し媚を含んだやり方で、キヨコは完璧に微笑む。誘うように薄く開いた唇を見て見ぬフリをしながら、カズマは心の中でほんの一瞬だけ逡巡する。

——他人のものを欲しがるとクセ、そろそろ直したほうがいいよ。リクの言葉が頭をかすめたが、それは水に投げたコインみたいに、ごく小さなさざ波を残してあっさり意識の奥に沈んだ。

べつにオレが欲しがったわけじゃない。それに、他の事情だってある。

カズマは彼女につかまれたままの手をそつと引き抜いた。

「オレのバイトの事、水村さんや顧問には内緒にしてくれてますよね？」

進学校であるカズマの高校では、基本的にバイトは禁止なのだが、コンビニやファミレスなどでかくれてバイトしている連中がずいぶっていて、教師もある程度は黙認状態だった。でも、カズマの場合はバイト先かなりの問題がある。なんせカズマはキャバクラで裏方の手伝いをしているのだから。特に陸上部は顧問の先生が風紀に厳しく、バレればカズマ本人の退部だけでは済まない。県代表選手に選ばれている部長の水村にも迷惑がかかるだろう。

ケンカ中の恋人の名前が出たことで、キヨコはあからさまに嫌な顔をした。学校で一番人気の自分の誘いに乗ってこないカズマの態度も少々面白くないのかもしれない。

「バイトね……。今のところは何も訊かれてないから大丈夫よ」

ムスツとしてつつけんに受け答えをするキヨコを、一瞬しらけたような目で見たが、カズマは思い直して言った。

「もしも水村さんにきかれたら、しゃべっちゃう？」

カズマはキヨコの肩を強い力でグイと抱き寄せた。彼女の目が大きく見開かれ、次いで喉を鳴らす猫のように満足げに細められる。

キヨコは薄くルージュをひいた唇をちろりと舐めた。

「カズマの態度しだい、かな」

…… ったく、しょーがねえな。

内心はため息混じりでも、カズマは自分が一番魅力的に見えるやり方でキヨコの顔を覗き込む。口角を上げ、わずかに目を細めるのがポイントだ。女王さまの機嫌を損ねないように、セリフにも気をつけなくてはならない。

「もしかして、オレって、キヨツコさんの下僕ってワケですか？」

「そうね、そういうのも楽しそう」

冗談のつもりが、女王さまは嫣然と微笑む。急速にキヨコへの興味が失せてゆくを感じながら、柔らかい唇に唇を重ねた。うつとりとした表情で目を閉じ、キヨコはカズマの汗ばんだ背中に細い腕を回した。

水村とうまくいつていないというのは本当の事だろう。キヨコはかなり積極的だった。

盛り上がってるところ悪いんだけど、部長と揉めたくないし。

カズマはピタリと体を密着させて、貪るようにキスをしてくるキヨコをやりわりと引き剥がすと、照れたように微笑んだ。

「キヨツコ先輩、これ以上は、マジ、ヤバいっすよ。オレ、部長に殺されちまう。んじゃ、また明日」

—— 口止め、完了。

物足りなさそうな顔のキヨコにひらひらと手を振ると、カズマは部室へ向かってダッシュした。

すっかり暗くなった大通りを渡り、カズマはネオンが目立ち始めた繁華街に向かって歩調を速めた。バイトの時間ギリギリだ。

「まあ、多少の遅れは大丈夫だよな」

言い訳のようにつぶやく。もともとやりたくて始めたバイトではない。十歳年上の従兄・ツヨシが店長を勤めるキャバクラで、厨房の手が足りないから、ほんの少しの間だけでもと頭をさげられたの

だ。風俗店に出入りするなどんでもないと、母親は大反対だったが、身内の頼みを断るわけにもいかないという父親の説得で、渋々承知したのだった。

ピンクの看板を掲げた雑居ビルが見えてきた。最近は学校のPTAの見回りなどもあり、制服姿ではこの界限に近付くのも一苦勞だった。カズマは紺色のネクタイを外すと、ズボンのポケットに突っ込んだ。夏休み明けの季節、Yシャツに紺色のズボンだけならこの学校かなど夜目にはわからない。それでも念のため、カズマはいつものように慎重に周囲に目を走らせた。

「あれ……？」

さつき渡った大通りの遥か向こうに同じ学校の制服が見えた。白いYシャツに紺色のプリーツスカートをはいた小柄な少女が誰なのか、カズマは五十メートル以上離れているにもかかわらず、わかつてしまった。

三井……いや、北斗マヒロ。

カズマは繁華街に背を向けると、吸い寄せられるように大通りのほうへと戻り始めた。

ガードレールを乗り越えて、行き交う車の流れをやり過ごしながら一気に大通りを横切ると、足音を忍ばせてマヒロの佇む横路を目差して歩いて行った。

彼女は街路灯の下に立って、目の前の大きな看板を見上げていた。
《三井デントタルクリニク》

看板を見たカズマは、少々拍子抜けした気持ちになった。きっと歯医者に行こうかどうかどうしようか悩んでいるのだろう。カズマだって歯医者は苦手だ。あのキーンという音を聞いただけで鳥肌が立つ。クラスメイトなのだから、このまま黙って帰るのも何だなと思い、手を挙げて声をかけてみた。

「こんなとこで何してんの？」

振り向いたマヒロの顔を見て、カズマはドキリとしてその場で固まった。

マヒロの小さな顔は涙でぐしょぐしょだった。彼女は喉の奥で「あ！」と叫ぶと、怯えた小動物のような目でカズマを見て慌てて涙を拭った。

「あ、ゴ、ゴメン……」

何と言つてよいかわからず、バッドタイミングを呪いながら長い前髪をかき上げる。しかし、マヒロの目はカズマをスルーして、その背後に釘付けになっていた。彼女の黒い瞳が大きく見開かれる。マヒロの視線を辿るように振り返ると、黒塗りの乗用車が大通りに停車するのが見えた。乗用車はハザードを点灯させてそのまま留まっている。

「おまえんちの車……？」

カズマが訊ねると、マヒロは小さく頷いた。瞳が悲しげに曇る。

「あのさ、オレ……」

何を言おうとしたのか自分でもよくわからないが、とつさにカズマはマヒロの行く手をふさいでいた。マヒロがおびえたように一歩あとずさる。カズマの後方でクラクションが一回鳴った。

「どいて！」

マヒロは予想以上に強い力でカズマに体当たりしてきた。よろけたカズマの横を風のようにすり抜けて、マヒロは黒塗りの車の方へと走って行ってしまった。

「カズくん、何ぼんやりしてるの？」

声をかけられて、店のカウンターに入っているカズマは、グラスを磨く手を休めてにこっと笑った。

「こんばんは、アユミさん。今日もキレイっすね」

キャバクラ「スマイル」の一番人気・アユミは現役の女子大生で、法学部に所属している。白いタートルネックのノースリーブに、ツイードのプリーツスカートがいかにも女子大生っぽい。ただ、商売だからスカート丈は絶妙な長さのミニ丈だ。

アユミは容姿もさることながら、その頭の回転の良さで一流企業

のエリートたちから絶大なる支持を得ていた。学費の為に働いていると言いなから、彼女はこの仕事に気が入っているらしい。

「カズくんこそ、バーテンダーのコスチュームが板についてきたわよ。キミ、期間限定バイトって言わなかったっけ？」

まだ店はオープン前なので、アユミはリラックスした表情でカウンターのスツールに腰掛けた。数人のキャバ嬢たちが黒と白の大きなチェッカーフラッグみたいなカーペットの敷かれたフロアを歩き来するのを目で追いながら、カズマは冷蔵庫から冷えたカットパインを取り出して小さな皿に載せた。

「ツヨシ兄さんには、内緒ね。あと他の子たちにもね」

アユミが驚いたように目を大きく見開く。

「やだ！ カズくんたら、チョー優しいじゃない。気が利く男って、私大好き」

アユミはカウンターに身を乗り出すと、カズマの滑らかな頬にチュツとキスをした。

「カズくんに乗り換えちゃおうかな。若いし、スタミナありそう」

「マジで？ 彼氏、泣くよ」

「うっそだよ。あたし、お子ちゃまじゃ、満足できないもん」

「満足って、なにが？」

「うふふ、なにが、じゃないの。ナニよ、ナニ。きゃあ、カズマ赤くなってるし」

「なあってねーし」

パインを頬張りながらあっけらかんと笑うアユミと、ちょっと卑猥な下ネタで盛り上がったたりするのは結構楽しい。期間が終わっても店をやめられない理由は単純なのだ。アユミ同様、カズマもこのバイトがえらく気に入っている。最初は裏方で皿洗いやつまみ作りをしていたのだが、いつしかバーテンダーのまね事をさせてもらえるようになった。たぶん、店長のツヨシも最初からそのつもりだったのかもしれないと最近になって思う。カウンターに入るようになると、カズマは店の女の子たちだけでなく、一部の男性客からも可

愛がられるようになった。

「キミかわいいね。ジャニーズの……ほら、何ていったつけ、携帯のCMの子に似てるな」

よく客から言われる。傲慢なようだが、カズマは自分の容姿をかなり気に入っており、心の中では話題のCMタレントより上だと思っている。

「おいカズマ、アユミちゃんに手を出すなよ。今日は彼女の上客が来る予定なんだからな」

カウンターの背後にあるドアから、店長のツヨシが現れた。光沢のある紺色のスーツが良く似合う。肩にかかるさらさらの長髪を、首の後ろで無造作に束ねているが、けっして不潔には見えない。その理由は、ツヨシがこんな店を経営しているより、本人がホストクラブに行ったほうがよほど稼げるんじゃないかと思うほどのいい男だからだ。やわらかな物腰と少し下がり気味の目が魅力的だと店の女の子たちが口々に言う。店長に惚れて店に留まっている女の子も少なくない。自分たちはイケメンの血筋なのだろうが、自称いい男のカズマも、ツヨシには叶わないと認めている。

「お前のバイト代から引いとくからな」

カットパインの皿に目を落とし、カズマの頭を軽く叩いてツヨシはアユミに向き直った。

「わかってるわよ、店長」

アユミは面倒くさそうに言って、ペロリと舌を出した。

「アイツは上客だし、オレの友人なんだ。出来るだけ希望に添ってやってくれないか？」

「いいわよ、あの人店長に負けず劣らずカッコイイし。今夜はしっかりと楽しめそうだな、なんてね。……おっと、私って、もっと知的なキャラが売りだったわよね」

ツヨシは眉根を寄せると「アイツのこと、頼むよ」と意味ありげにアユミの肩に手を置いた。その手をつかまえて、アユミがツヨシを無言で見上げる。ピンクに塗られたネイルに、カズマの視線が吸

い寄せられる。

見つめ合う二人を気まずい思いでチラ見していると、ツヨシはやんわりとアユミの手をほどいて背後の事務室に消えた。

事務室のドアを見つめて、アユミはグチともつかぬことを言う。

「店長の友人さんさあ、結婚したてなのにこんな所に来てていいわけ？」

「新婚さんは、酒飲みに来ちゃいけないんですか？」

カズマが思わず問い返すと、アユミはピンクの唇を歪めて言った。「だって、今日は私とアフターを希望なのよ？ 二人きりで飲みたいたってさ。どう考えたって、おかしいじゃない。……だって、ホテルのラウンジだよ？ ホ・テ・ル」

一語ずつ区切って、再び事務所のドアに目を向けたアユミは、ぷうつと頬を膨らませる。

「アフターって、ようするにお持ち帰りってことですか？ そ、そんなことまで店長があっせんするの？ やばくね？」

想像をたくましくしつつたずねると、アユミは頬にためていた空気をぷつとふき出した。

「やだ、セックスするかってこと？ 冗談じゃないわ。店長がそんなのあっせんしたら売春じゃない。バカねえ、二人で飲むだけよ」「でも、ホテルって……」

「まあね、店長に言わせると、飲んだその先は自分の責任だからね、だって。……ホント、冷たいな」

アユミの切なげな微笑みを見て、ふいにカズマはマヒロのことを思い出した。

ぜんぜん似てないのに、何でだろう？

十一時をまわり、ようやくバイトが終了した。週に三日間だけだったが、夏休みと違って寝坊できない分さすがにづらい。居残りのバイト男性に「お疲れ様」と挨拶し、カズマは雑居ビルの裏口から表に出た。ふと目を上げると、ピンクのストールを羽織ったアユミ

が背広姿の男性に寄り添っているのが見えた。茶色のブーツを履いた長い足は、遠目に見ても少々おぼつかない。気持ちよく酔っているようだ。

「あれがウワサの上客か」

カズマは独り言をつぶやき、男性の横顔に目を凝らした。アユミの言ったとおり、ツヨシに負けず劣らずいい男だ。縁の無いメガネが少々硬い印象を与えるが、そのぶん知的でクールと言えなくもない。エリートサラリーマン風で、清潔そうに切りそろえられた髪をごく自然に後ろへ流している。背が高く肩幅もそれなりにあって、背広が似合うモデル体型だった。

新婚のクセにキャバクラ嬢を買う男。変わったヤツもいるんだな、とカズマは興味を失くして二人に背を向けると、深夜の繁華街を後にした。

「カズマ！ 昨日、やったか？」

リクは地声がでかい。

「んなわけねえだろ」

ぼそりとつぶやいた声は、リクには聞こえなかったらしい。

「いいよな、モテ男くんはよ」

朝っぱらから教室に声を響かせるリクを無視してカズマは席を立った。教室の後ろのドアへ歩いて行くと、登校してきたマヒロとぶつかりそうになった。

「あ……」

小柄なマヒロは、カズマの胸の高さから驚いたように見上げている。やわらかそうな白い頬がバラ色に上気している。カズマはごくりと唾を飲み込んでからささやくように小声で言った。

「あの、昨日は妙なところで会った、ね」

マヒロは口元に手をやり、次いでさっと目をそらした。

無視された？

昨日、何か気に障ることでもしたのだろうかと思い返していると、

すぐ後ろでリクの声がした。

「便所いくのか？ 友よ、オレも行くぜ！」

リクは足音高く走ってくると、いきなりカズマの背中に飛び乗った。

「ちょ、それやめろって！」

受け止め損ねてよろけたカズマは、リクにのしかかられたまま倒れこんだ。

ゴッソッ！

ん？

何かが床にぶつかる嫌な音と、腹の下の柔らかい感触に慌てて立ち上がる。

「うわ！ ゴメン、大丈夫か？」

カズマの下敷きになって、マヒロは体を横向きによじつたが、起きられないようだった。そのまま後頭部を押さえてうめく。

「やべえ、どうしよう！」

リクがマヒロのそばにしゃがみこんで、後頭部を押さえている彼女の手を退かした。

「おい、頭、血がでてるぞ」

頭から外した手のひらにも、わずかに血が付いていた。

「だ、大丈夫ですから」

頭を押さえているマヒロを抱き起こすと、リクが大きな声を出した。

「カズマが悪い。早く保健室に連れて行け！ はやくっ！」

「お、おう」

彼の声にあっとうされ、カズマは言われるままにガクガク頷く。

マヒロはリクに上半身を支えられて座り込んでいる。彼女の肩と膝の下に手を入れると、カズマはひよいと抱え上げた。

軽っ……！

小柄なマヒロは想像以上に軽い。

「いいです！ 自分で行けますから」

暴れるマヒロを横抱きでギュツと胸に抱えて、カズマはよろよると廊下を走り出した。

朝の廊下は登校してくる生徒でごったがえしている。すれちがうたびに、何人かの生徒は目を丸くし、大多数の生徒は大笑いしながらカズマを指さした。階段を降り、渡り廊下に出たところで、カズマはようやくリクの罨にはまった事に気付いた。悪いのは、どう考えてもリクだ。

落ち着きを取り戻すと、乳酸の溜まってきた腕の中、マヒロがリアルな重みを伴って存在感を増す。カズマはチラリと目を落とした。マヒロはカズマの胸に顔を埋めて震えている。恥ずかしかったに違いない。耳が真っ赤だ。カズマは急に胸がドキドキしてきた。

「ごめんな、頭、痛いかな？」

立ち止まって嘔くと、マヒロは相変わらずカズマの胸に縋りついたままいやいやをした。

とにかく保健室へ急ごうと歩き出すと、マヒロはくぐもった声で言った。

「桃井くん、あの事、黙っていてほしいの」

「え？」

マヒロはカズマの胸に頬を寄せたまま泣きそうな顔で言った。

「あの時あそこで泣いていた事……、誰にも言わないでね」

カズマは大きくうなずく。その口止めにどんな意味があるのかなんて、全くわからなかったが……。

負傷箇所が頭だった事で、大事をとって学校からマヒロの家族に連絡がいった。一時間目が始まってしまったが、ケガをさせてしまった事を謝ろうと、カズマはそのまま保健室の外でマヒロの家族を待つことにした。

ひょっとしたら、マヒロの旦那に会えるかもしれない。だけど、…会ってどうする？

どんなヤツか、見るだけさ。……マヒロの男がどんなヤツなのか、

見るだけだ。

見るだけで気が済むのか？

自分自身の心の声にドキリとしたとき、担任の男性教師がやってきた。

「なんだ、カズマがケガさせたのか？　しょうもないやつだ」

担任の言葉に肩をすくめると、カズマはムスツとして言った。

「アイツの家族に謝ろうと思って、待ってんだけど」

担任は意外そうな顔を見ると、ニコツと笑ってカズマの肩をポンと叩いた。

「マヒロの家族は来ないんだよ。迎えの車が来てるから、このまま帰るそうだ。ご家族にはボクからよく事情を説明しておくから」

後頭部にガーゼを当てたマヒロが養護教諭に連れられて保健室から出てきた。

「大丈夫か？」

カズマの姿を見つけると、マヒロはニコツと笑って小声で言った。

「心配かけて、ごめんね。ありがとう」

声が、涼やかな風のように耳に触れて流れ込む。カズマの心臓がトクンと跳ねた。

カズマは担任と並んで、マヒロのをせた車を見送った。

黒塗りの車で送り迎えなんて、マヒロの嫁ぎ先はどんだけ金持ちなのだろうか？　少なくとも庶民レベルでない事は確かだ。

カズマはため息をついた。さっきまで自分の腕の中で身を震わせていた仔猫のような少女は、すでに誰かのものなのだという事実に、どうしようもない悔しさと、切ない思いが込み上げる。こんな事は初めてだった。

——他人のものを欲しがるクセ、そろそろ直したほうがいいよ。

リクの言葉が頭の中を回る。

誰かのものを欲しがるなんて、まるでガキじゃん。オレは、そんなんじゃない！

ふと昨日の場面が鮮やかに甦って来た。

《三井デントタルクリニックス》——三井マヒロ。

偶然ではないだろう。あの歯科医院はマヒロの実家に違いない。自分の実家を見上げてポロポロと涙を流していたマヒロ。そのことを黙っていて欲しいと言う。なぜだろう。愛する夫との希望に満ちた新婚生活に、何か不満があるのだろうか。それともただのホームシック？

帰り際、カズマは同じクラスで陸上部のユキノを捕まえた。

「なによ、またマヒロのこと？」

ユキノはあからさまに嫌な顔をした。

「ほら、オレ今朝アイツにケガさせちゃったから。頭だったし、気になって」

ユキノは疑わしげにカズマを見ていたが、やがて情報を流してくれた。

「そうよ、三井デントタルクリニックスはあの子の実家。それで今住んでいるのはY市の高級住宅街ですって」

「サンキュー、ユキノ！ ついでにそれも部長に渡しといてくれ！」

カズマはお礼の代わりにユキノに本日分の休部届けを手渡すと、カバンを抱えて教室を飛び出した。

電車とバスを乗り継いでようやくたどり着いたのは、デイトスポーツトとしても有名な、『丘の上近代美術館』近くの高級住宅街だった。

「ほえ、すげえ家ばっかし」

カズマはため息をついた。レンガ造りの瀟洒な洋館が建ち並んでいるかと思えば、一本通りを隔てたところは重厚な瓦屋根が目を惹いた。総ヒノキ造りのちよつとした料亭みたいな屋敷が何軒も並ぶ。そのうち一軒に近づき、緑の垣根から中をのぞく。見事な日本庭園の中央に、ひょうたん型の池が配置されており、そのなかに赤や黄色の錦鯉がうじゃうじゃ泳いでいる。

カズマはアディダスのバッグを斜め掛けにして、観光客気分で金

持ち住宅街を散策した。どこの家にも必ずセコムのシールが貼つてあるなあ、などくだらない事をチェックしているうちに、マヒロの家は見つかった。

《HOKUTO》

金のプレートにローマ字のネームが良く似合う建物は、ヨーロッパのお金持ちが住んでいそうな洋風の屋敷だった。茶色いレンガの壁に、青い尖塔付きの屋根。大きな玄関ドアを挟んで左右対称の建築様式は、世界史の教科書にちょこつと出てきたように記憶しているが、はて、何という名称だっけ？

曲線を描く背の高い鉄の門扉を見上げてカズマは暫く佇んでいた。門扉の間から見える屋敷は、日が翳ってくるとなんだかうら淋しく、ゴーストが出そうな気がしてきた。

デイズニールランドのホーンテッドマンションに、ちょっと似てるかも。

そんなことを思いつつ、うろろと屋敷の前を行ったり来たりしていると、ふいにインターフォンからしわがれた男性の声流れ出した。

『何か御用でしょうか？』

カズマは心臓が口から飛び出るかと思うほどに驚いた。何も悪い事をしていないのに、思わず逃げ出してしまいそうになったところに、玄関ドアが開いて声の主と思われる小柄な老人が姿を見せた。玄関ドアから門扉までおよそ三十メートルはあるつかという私道を、老人はよちよち歩いてくる。時間をかけてたどりついた老人は、黒い鉄の門扉を挟んでカズマの前に立った。両腕を後ろで組んで、上目づかいでじつとカズマを見ているが、門を開けてくれるつもりは全く無いようだった。

「あの、オレは……その……」

暑くもないのにダラダラと汗を流しながら、カズマはせわしなく体を揺すった。

「マヒロさまの学校の方ですか？」

表情の無いしわくちな顔で、白髪白髭の老人が尋ねた。カズマはガクガクと何度もしっこく頷いた。

「ご用件は、私が承ります」

「へ？」

カズマは老人の言葉を頭の中で反芻した。——ご用件は、私が承ります

……ってことは、会わせてもらえない？

カズマは門扉の鉄棒越しに、しわだらけの怪しい老人を見下ろした。きちんと背広を着込んだ老人を見て、頭の中に一つの単語が浮かぶ。——『執事』

カズマは老人の頭上をスルーして、夕闇に染まる大きな屋敷を見つめる。電車とバスを乗り継いでせつかくこんな所までやってきたのに、これじゃあまるで門前払いというやつだ。カズマは少々ムスツとして言った。

「マヒロさんのケガが心配でお見舞いに来ただけど、会わせてもらえますか？」

老人は胡散臭そうにカズマを上から下までしげしげと眺めると言った。

「マヒロさまは医師の診断の結果、とくに異常は認められませんでした。ただ、明日は大事をとってお休みなさる事を、担任の先生にすでにお伝えしてあります。ご安心なさって、本日はお引き取りください」

有無を言わせぬ老人の言い方に、何だかカズマは無性に腹が立ってきた。右手の拳を握り締め、「この石頭！」と、怒鳴りたい衝動を懸命に押さえつける。

「彼女がお元気かどうか、この目でご確認させていただきたいのですが、ご承知いただけないでしょうか？」

わざとバカ丁寧な言葉で言ったとたん、老人のシワの中に埋もれた目がキラリと光ったような気がした。ギクリとして身を硬くすると、老人は相変らずの無表情でピシヤリと言った。

「マヒロさまはどなたともお会いになりません。お引取りください」とうとうカズマの堪忍袋の緒がぶちっと切れた。

「何勝手な事言っただよ！ 取り次いでくれたっていいじゃねえか！」

カズマは門扉の鉄棒を掴むとガチャガチャと揺すった。老人は全く動じる様子もなく、変わらぬ口調で言った。

「お引取りいただけないなら、警察を呼ばなくてはなりません」

「け、けいさつ？」

「さよう。警察を呼ぶ前に、お引き取りください」

カズマはグツと唇を噛みしめると、北斗の屋敷に背を向けた。

ちくしょー！

立ち尽くすカズマの背後で老人が引き返してゆく軽い足音がした。カズマはやり場の無い怒りに震えていた。別に、マヒロに会って何をどうするなどという事はまったく考えていなかったが、こんな所までのこのこやって来たのに本人にも会えず、そのうえちっさいジジイに追い払われてスゴスゴと帰らねばならない自分に腹が立った。

どのくらいそこに立っていたのだろう。住宅街の歩道が明るくなったので、カズマはハツとして顔を上げた。ヨーロッパのガス燈を模した街路灯に柔らかなオレンジ色が点灯した。見上げたカズマは、ふと電柱が一本も見当たらないことに気付いた。

「場違いなんだよな……」

つぶやいて、背後の屋敷に目を向けると、三階の一番左端、尖塔型の屋根飾りの真下に明かりが灯った。サツとよぎった影はマヒロだろうか。

「だから、何だっというんだ！」

カズマはひと気の無い高級住宅街をダッシュで駆け抜けた。

彼女の事情

三日たつてもマヒロは来なかった。担任に聞きに行くと、頭のケガとは無関係の家事都合ということだった。腑に落ちない顔のまま職員室を出てきたカズマは、いきなり声をかけられてドキリとした。「ユキノ……？」

ユキノは付いて来いというように、アゴをしゃくると、教室とは別の方向へ歩き出した。もうすぐ午後の授業が始まるというのに、どこへ行くつもりなのだろう？

無言のユキノについて行くと、彼女は下駄箱で革靴に履き替えた。「おい、外、行くのか？」

困惑気味のカズマに、靴を履き替えるように指示しただけで、ユキノは元来た廊下を戻り始めた。

「おい」

カズマは諦めて、再び黙って彼女について行った。

ユキノは普段使われていない非常口から校舎の外に出ると、建物を回りこむようにして、校庭の金網沿いに歩いて行った。確かこの先には金網の切れ目があり、学校を抜け出すときの便利な通路になっている。案の定、ユキノは金網の切れ目に体を滑り込ませると外のアスファルトに飛び降りた。

「授業サボってどこ行くんだよ」

とうとう黙っていらなくなったカズマはユキノの腕をつかんだ。振り返ったユキノは一瞬何かを堪えるような表情をしたかと思うと、フツと笑った。

「カズマさあ、マヒロと連絡とりたいんじゃないの？」

「え！」

不意打ちを喰らったように、カズマは言葉を失った。

「大当たり」と言って、ユキノは踊るようにその場でくるりとターンした。短いプリーツスカートが跳ねる。

「知ってるなら、わざわざこんなことしなくたって……フツーにメアドとか教えりゃいいじゃねえか！」

何だかからかわれているようで、真っ赤になったカズマはむつつりと低い声を出した。ユキノは苦笑いしながら言った。

「やだ、私あの子と交流無いもん。メアドなんて知らないよ。聞いてみたけど、クラスの女子、誰も知らないみたいだよ」

カズマは眉根を寄せた。じゃあ、なんで？

疑問が顔に出ていたらしく、ユキノはなだめるように言った。

「隣の私立中学校にあの子の弟が通ってるんだって。だから、弟なら姉の事知ってるかもって思ったんだよ」

顔がわからないから、下校時刻に待ち伏せしてコンタクトを取るつもりだとユキノは言った。

「じゃあ、行こうか」

スカートの裾を翻して前を歩くユキノに、カズマはボソリと言った。

「お前……どうして？」

「さあね、どうしてかな……？」

ユキノは背を向けたままで応えると、僅かにグイと背筋を伸ばした。白いカーディガンの背中中、ユキノの茶色いロングヘアが秋風に揺れた。

マヒロの弟はすぐに見つかった。小柄でやせっぽちの少年は、見知らぬ高校生に怯えたような目を向けた。

「マヒロお姉ちゃんの、友だち？」

校門の前で立ち話をしていると、何台もの乗用車が校門を入って行った。少年は車を振り返りながら言った。たずねもしないのに。

「お迎えの車だよ。こんなの、毎日の、当たり前前の光景さ。……でもボクは、バスで帰るけどね」

どこか口惜しそうな少年を見ながら、ユキノが言った。

「公立高校通いの庶民には、わかんない世界だわね……」

ユキノの提案で、三人は近くのファミレスに入った。

「弟が金持ち中学でさあ、どうしてマヒロは庶民の高校なわけ？」

大きなフルーツパフェをつつきながら、ユキノが無遠慮に言う。

弟はようやく二人の高校生に馴れてきたようで、チョコレートケーキをほおばりながら言った。

「マヒロお姉ちゃんは、タネチガイだからだつてさ。パパがそう言った」

ふーんと言って、カズマとユキノは目を合わせた。フクザツな家庭の事情つてヤツだ。

「マヒロお姉ちゃんは二年前にうちの子になったんだよ」

興が乗った様子で、少年は特ダネをバラすようにニヤリとした顔つきで言う。もっと聞きたい？　と言っているようだった。

ユキノが笑顔でファミレスのメニューを差し出した。

「よかつたら、もっと食べなよ。このおにいちやんがご馳走してくれるから」

「な……！」

コーヒーをちまちまとすすっているカズマの目がつり上がったのもまるで無視し、ユキノはプリンアラモードを追加注文した。

弟の話によれば、二年前に急に母親にもう一人子供がいることが発覚して、三井家は大騒ぎになったとのことだった。

「お母さんがバツイチだったなんて、ボク初めて聞いたんだもん」

マヒロの父親が病気で亡くなったために、彼女は別れた母親をたよって三井家にやって来たらしい。

「マヒロお姉ちゃん、とつても大人しいから居るんだか居ないんだかわかんないし、ボクは別に好きでも嫌いでもないよ」

そう言つて弟はカズマにマヒロの携帯番号とメールアドレスを教えてくれた。目的は達成したのでカズマが伝票を掴むと、ユキノが唐突な質問をした。

「ねえ、マヒロって、なんで結婚したの？」

カズマは首をかしげた。そんなの、縁があつたからに決まってい

るじゃないか。

弟は「ふふふ」と目を細めて二人の高校生を見て言った。

「内緒だよ」と前置きして、彼はとんでもない事を口にした。

「やつかいばらいだって。それから、コネを作るため、とかなんとか言ってた。お母さんは泣いてたけど、お姉ちゃんが自分で決めたみたいだよ」

黄色い街路樹を見上げながら、カズマはマヒロに思いを馳せていた。実家を見ながら一人で泣いていたマヒロ。お化け屋敷みたいな家で暮らすマヒロ。送り迎え付きで、友達と接することもないマヒロ。バラ色の新婚生活とはかけ離れたヴィジョンばかりがカズマの脳裏に去来した。

「あいつ、今ごろ何してんのかな」

ぼつりとつぶやいたとき、それまで黙っていたユキノが強い口調で言った。

「カズマ、何考えてる？」

「え……？」

「まさかと思うけど、マヒロを好きになったからって、どうにもならないんだよ」

カズマはユキノの顔をじっと見た。切れ長の目がカズマの瞳をとらえ、その奥の奥までさぐるように覗き込む。耐えきれなくなつて目をそらしたカズマに、ユキノは厳しい口調のまま、諭すように言った。

「わかつてるよね、カズマ。マヒロは人妻なんだよ。法律で定められた、北斗さんの正式な奥さんだ。誰かの彼女を取るのとは訳が違うんだからね」

ユキノの言葉が、カズマの胸に深く突き刺さる。

「そんなことわかつてるよ。何言ってるんだよ」

震える唇で言葉を絞り出し、カズマはユキノにくるりと背を向けた。わかっていると言いながらわかっていない自分を自覚して、動揺する顔を見られたくない。追いかけるように、ユキノの言葉が背

中に聞こえる。

「マヒロのプライバシーを詮索するのは失礼なことだ。それに今日の目的は、あの子のケガの様子を知るために連絡先をつかむことだったはずよ」

ユキノは、まるでカズマの心を読んでるように言う。

「あの子の結婚生活が幸せなのかそうでないかなんて、他人には決してわからないだよ」

胸をえぐるようなユキノの言葉は、いちいちもつともだった。やり場のない感情が込み上げてきて、カズマは近くにあった街路樹の根元を思いつきり何度も蹴った。鮮やかな黄色の葉がバラバラと頭の上に舞い落ちる。

「やめなよ、カズマ」

ユキノがため息混じりに声をかけるが、カズマの行動は止まらない。幹がしなり、排気ガスをまとった葉が音を立てて落ち続ける。

「ねえカズマ、授業もさぼっちゃったことだしさ、これから二人でどっか行かない？」

「行かない」

間髪を入れずに即答し、カズマは木の幹を蹴り続ける。頭のなかをマヒロの弟の言葉がぐるぐる回る。

—— やっかいばらいだって。

—— マヒロお姉ちゃん、居るんだか居ないんだかわかんない。そうじゃないだろ！

心の中でふつつと何かが湧きあがり、カズマの思考いつぱいに膨れ上がる。

どうして、誰もアイツのこと気にしてやらないんだ？ 同級生って一年間同じ空間にいる、ただそれだけのことなのか？

ユキノがカズマの袖を引く。

「ゲーセンいく？ カラオケでもいいよ。あたし、駅前の店の割引券もってるから……」

「行かねつつってんだろ！」

カズマはユキノの手を振り払った。大きく弧を描いた腕のやり場に困り、そのまま拳を固めて木の幹を一発殴った。散々蹴りつけられた街路樹からは、もう一枚の葉っぱも落ちてこなかった。

肩で息をして佇んでいたカズマは、急に背中から抱きすくめられて、大きく目を見開いた。ユキノがカズマの背中に顔を押し当てて囁いた。

「カズマにあの子をあきらめてほしくて、私、今日つきあったんだよ。あたし、本当は知ってたんだ、マヒロの結婚相手のこと」

「え……」

「北斗多一郎さん。お見合いのようなモノだって聞いたけど、なにが事情があるみたい。マヒロも……ずっと暗い顔してるの、気づいてたし」

「じゃあ、どうして？」

「カズマ、あたしのこと陸上部の仲間としか見てないけど、でもね、あたしはずっとカズマが好きだった」

「ユキノ……？」

胸に回されたユキノの手に力がこもる。カズマは固く組み合わされた彼女の細い指を見下ろした。自分の鼓動に重なるように、もう一つの鼓動を背中に感じる。

なんだか息が詰まる。

「あの子を見ないで、あたしを見て欲しい。マヒロはもう北斗さんのモノなんだから、どうしようもないじゃん。マヒロなんて、どうだっていいじゃん！」

いきなりの事に、どうしていいかわからず、カズマはユキノから逃れるように身をよじった。肩越しに、背中にしがみつくユキノの茶色い頭髮が見え、くぐもったつぶやきが聞こえた。

「初めて会ったときから好きだった。……あのとき、勝負に勝たなきゃよかったなって、ずっと後悔してたんだよ」

「え……勝負？」

今年の春休み、桜の木の下で初めてユキノに会った。四月にこの

学校に編入する予定だから、陸上部に入れて欲しいと水村部長にあいさつしていたっけ。私服姿で陸上部の練習を見学していたユキノに、最初にちょっかいを出したのは確か自分だったと、急に思い出す。

——短距離やってんだって？　じゃあ、オレと競争しない？　200の勝負でハンデ40メートルやるよ。

——あたし、けっこう早いわよ？

茶色のロングヘアのせいかな、どことなく自分と同じようなニオイがしたし、つんとアゴを突き出す仕草がナマイキだったから、つい軽口を叩いたのだ。

——じゃあ、オレが勝ったらチューしてくれる？

そつと耳打ちすると、ユキノは不敵な笑みを浮かべた。

はやし立てる部員たちの声に押し込まれるように、ユキノはフィールドに立った。カズマの脳裏に、すぐ前を美しいフォームで走るユキノの後姿が鮮やかによみがえる。ミニスカートから伸びた長い足、後方に流れる茶色いロングヘア。ゴールまでとうとう追いつかなかった、春の日……

二年生になったとき、同じクラスにユキノの姿があった。夏休み中も毎日部活で顔を合わせていたユキノ。姉御肌でサッパリしていて、あつという間にみんなに溶け込んだ彼女は、他の男子部員からも「アネゴ」と呼ばれて人気がある。そのユキノが自分に特別な感情を持っているなんて、思いもよらなかった。

「オレ、ユキノは水村部長が好きなんだと思ってた」

ユキノはカズマを解放すると、ポツリと言った。

「私はカズマみたいに人のモノを欲しがったりしないのよ」

街路樹の歩道を学校に向かって駆けて行く、ユキノの綺麗なランニングフォームを見つめながら、カズマは混乱する頭を抱えて途方に暮れていた。

部活の間、ユキノはカズマを無視した。憂鬱な気分で練習を終えると、カズマはバイト先のある繁華街へ向かった。バーテンダーの

コスチュームに着替えてカウンターに入ると、店長のツヨシが険しい顔でカウンターのスツールに座った。

「ツヨシ兄ちゃん、何かあったの？」

ツヨシはハツとしたような顔をしたが、すぐにいつもの営業スマイルに戻ってニコツと笑った。

「カズマは悩みが無さそうでいいよなあ」

パフパフとカズマの頭を叩いて、ツヨシは灰皿を引き寄せると、タバコに火をつけた。

もうすぐ開店の時間だが、のんびりしていいのだろうかとなり、カズマは当たり障りの無い事を言った。

「今日はアユミさん、遅いね。お休み？」

「……ああ、うん。……誰かと旅行だそうだ」

カズマの頭の中に、この間のアユミと上客の後姿がちらついた。

「その誰かって、きつとアユミさんの彼氏だ」

ツヨシの訝しげな視線に、カズマは違うという意味で両手をひらひらと振った。

「いや、以前に彼氏がいるみたいなこと言ってたし。……ただ、アユミさんみたいな仕事してるとさあ、その、彼氏っていつも心配じゃないのかなあ？」

何気なく言っただけだが、なぜか睨みつけられてしまい、カズマはうつろたえた。

「仕事なんだから、仕方がないんじゃないのかな。そんな事いちいち気にするような器の小さいヤツに、アユミの彼氏はつとまらないだろう！」

珍しく声を荒げるツヨシに、店内に居た女の子たちが何事かと一斉に振り向いた。

「週末のかき入れ時だっというのに、ナンバーワンに連休されたんじゃない、商売にならない」

吐き捨てるように言うと、ツヨシは大股でフロアを横切って事務所へ続く扉に消えた。

ぼんやりと事務所の扉を見つめているカズマの前に、ナンバーズのミキがやってきた。胸元の大きく開いた黒いニットワンピースにラメ入りのシルバーストールを羽織っている。やや濃い目の化粧が大人の女性の色気を惹き立てている。アユミが知的で清楚なら、OLをしているというミキは、スタイルと色気がセールスポイントだった。

「何か、アユミちゃんをめぐってお客とトラブってるらしいわよ」「ふーん、大人も大変なんだな」と、わかった風な口を利いてみると、ミキはクスクスと笑ってカズマの頭をぐるぐる撫でた。乱されたヘアスタイルを気にしつつも、カズマがニコツと微笑んでみせると、ミキはとろけるような眼差しを返してきた。カズマの笑い方は年上女性の母性本能をくすぐるらしい。すかさず情報をゲットするためにたずねてみる。

「ねえ、そのお客ってだれ？」

「必ずアユミちゃんを指名する、店長の友人よ。何でも、女性議員の秘書をしているんですって。スーパリエリートよね。私にもそんなお得意さんが出来ればいいのに」

ミキはスツールから降りると、豊かなヒップをフリフリ来店したお客を出迎えに行ってしまった。

ここにいといるといい勉強になるないつも思う。女性のこと、客のあしらい、そんなことのほうがこれから生きてゆく上で学校の勉強より何倍も役に立つんじゃないかと思う。

カズマは早速注文の入ったシャンパンの栓を抜いた。楽しそうにお客と会話をする女性たちを目で追いながら、カズマはまたマヒロの事を考えていた。学校にも来ず、あの暗い屋敷の中でマヒロは毎日何をしているのだろう。あれほどの金持ちの家ならば、家事をする必要も無いだろうし、それが幸せと言えなくも無いが。

明日は土曜日だし……月曜日は学校に来るのかどうか、電話してみようかな。

カズマはポケットの中の携帯を握り締めた。

何度かけてもマヒロの携帯は繋がらなかった。仕方が無いのでメールを入れて連絡を待つことにした。

「このメールもいつ見てくれるやら」

土曜の午前十時、混み始めた商店街を歩く。大きなバッグを背負って部活に向かう道すがら、カズマはため息をついた。

学校の部室で着替えてグラウンドに出ると、部長の水村がたった一人で待っていた。

「あれ？ みんなは？」

キヨロキヨロと辺りを見回すカズマに、水村は聞いたことも無いような冷たい声で言った。

「今日はお前だけ特別だ」

「へ……？」

「知つてのとおり、もうすぐ全国大会がある。お前は短距離だが、中距離もいけるだろう。オレの併せ馬として、中距離の練習につきあえ」

「何でオレだけ？」そう言おうとして、カズマは口をつぐんだ。グラウンドの片隅で、マネージャーの大橋キヨコがこちらを見ていた。へー、そういうこと。

水村らしいやり方だった。彼女の前で徹底的に上下の差を見せつけようという魂胆が見え見えだった。どちらが実力があり、どちらが上に立つものなのかをハッキリさせようというのだろう。

バカらしい！ カズマは心の中で水村に向かって唾を吐いた。

千五百メートルを十本走らせたところで、水村はようやくカズマを解放した。走り慣れていない中距離はペース配分が難しく、カズマはゴールに倒れたまま大きく胸を喘がせた。

酸欠状態でグラウンドに転がっているカズマを一人残して、水村とキヨコはサッサと引き上げて行った。

——人のモノに手を出すからだ。

そんな水村の声が聞こえた気がしたが、限界を超えていたカズマ

の意識は、とうとうフェードアウトした。

携帯の着メロで意識を取り戻した。いつの間にか陸上部の部室に転がされていた。

ふらつく足で立ち上がり、ロッカーの中から携帯の入ったバッグを引きずり出す。

「……もしもし」

掠れた声で応答すると、ゲラゲラ笑うリクの声が流れ出した。

『気がついたらしいぞ、ギャハハハ、え？　そうそうカズマだよ！』
複数の男子の声が不愉快な雑音となつて、耳に流れ込む。どうやら倒れたカズマは野球部の連中によってここまで運ばれたらしい。

『火遊びもたいがいにしるよな！』

嫉妬に狂った水村によつて、理不尽なシゴキを受けるカズマを見て、野球部の連中はかなり楽しんだようだった。

「見物料金払え！」

カズマは大声で喚いて通話を切った。携帯を放り出し、汗と砂にまみれたＴシャツを脱いで部室の床に叩きつける。すると転がっていた携帯がメールを受信した。メッセージを見たたん、腹立たしさが一気に消しとんだ。

《メールありがとう。とても嬉しかったです。》

私は今、学校の図書館に居ます。少しだけなら時間があるので、部活が終わったら寄ってみて下さい　マヒロ《

「やった！」

カズマは大急ぎで制服に着替えると、図書館を目差して走り出した。さっきまで酸欠状態で気を失っていた人間とは思えない、見事な走りっぷりだった。

——人のモノに手を出すからだ。

先輩からのありがたい忠告は、カズマにとって何の教訓にもなっていないかった。

窓際の日当たりのよい席に、北斗マヒロはポツンと座っていた。土曜日の午後、広い図書館には他に人影は無かった。図書館など、一年生の最初の頃に一度来たきりだったカズマは、少々緊張気味に静かな室内を移動して行った。椅子を引いて正面の席に座ると、マヒロは読んでいた本から目を上げた。

「……ケガ、大丈夫？」

声をかけると、マヒロは一瞬首をかしげ、それから「ああ……」と言って頷いた。

「あの時は、ありがとう……。その、わざわざ、保健室まで……」
小声で言つて、マヒロは真っ赤になった。彼女を抱っこしたときの温もりと重みが鮮やかに甦つてきて、カズマは無意識に胸を押さえた。

柔らかな日差しに包まれた図書館に、心地良い沈黙が降りて来る。カズマはふと思いついて自分のカバンを探ると、マヒロの目の前に、昨日配られた数枚のペーパーを置いた。

「これ、修学旅行のプリント。見てないだろう？」

マヒロは目を輝かせてプリントを手を取った。

「来月だね。北海道か……私、行ったことないんだ」

「オレもだよ」

ニコツと笑ったカズマに目を向けて、マヒロはポツリと言った。

「修学旅行、行きたかったな」

マヒロはカズマの手にプリントを返すと、淋しそうに笑った。

「私、修学旅行、行けそうもないから」

「え……」

家の都合なのだろうか。しらなかったとはいえ、カズマは自分のタイミングの悪さ呪った。

「楽しんできてね」と言つてマヒロはふわっと柔らかい笑みを湛えた。ほんのり色づいた頬と、可愛らしいピンクの唇にドキリとする。「おみやげ、いっぱい買ってきてやるよ」

照れ隠しに言つと、マヒロは目を輝かせて「ありがとう」と小さ

く頷いた。

マヒロの帰る時間になってしまったので、二人は並んで図書館を出た。何だかもう少しだけでも一緒に居たくて、カズマはわざと遠回りをするように、校舎の裏手の道を選んだ。マヒロは大人しくついてきた。

黄色く色づき始めた銀杏の木々を横目で見ながら、カズマは思い切って言ってみた。

「あのさあ、たまに電話とかしても、いいか？」

彼女の足が止まったので、カズマは何気なく振り返った。マヒロは困惑したような表情で、ゆるゆると首を横に振っていた。

「携帯にでも、ダメ？」

気軽な様子を装ってみたが、結果は同じで、さらにトドメのようにマヒロの口から拒絶の言葉が流れ出た。

「……北斗さんに叱られるから。ごめんなさい」

——北斗さん

よそよそしい言い方だったが、すっかり舞い上がって忘れていた。いや、忘れたフリをしていた。

「そっか、旦那に怒られちゃうよな。そりゃそうだ、うっかりしてた。……オレって、ダサいな。なんか、お前とゆっくりしゃべれたの初めてだったから、すっかり友だち気分で浮かれちゃった」

あっさりと玉砕したショックを隠すように、「気にしないでくれ！」と笑い飛ばすと、マヒロは驚いたように黒目がちの目を見開いた。

「友だち？ お友だちになってくれるの？ 桃井くんが、私のお友だち？」

「だって、同じクラスじゃん」

マヒロの目から大粒の涙が転がり落ちた。カズマはギクリとして身を硬くした。何か、気に障ることも言ってしまったのだろうか？ マヒロは両手で顔を覆って小さく嗚咽を漏らした。

「おい、どうした？ オレ、何か気に障る事、言ったか？」

オロオロとマヒロの周りを回りながら、カズマは懸命に明るく声をかけた。マヒロは鼻をすすると小さな声で言った。

「あんまり嬉しかったから、つい……。ごめんなさい」

カズマはホツと胸を撫で下ろすと同時に、熱い衝動に駆られて眩暈がした。目の前のマヒロがたまらなく可愛いと思った。誰のものだろうが、関係ない。今すぐこの腕に抱きしめて、そして……！

「私、お友だち居ないから、すごく嬉しい。メールなら大丈夫だから」

そう言っで涙を拭ったマヒロはニコツと笑った。

カズマは大きく深呼吸をすると、込み上げる衝動を必死に押さえつけた。

「じゃ、メールするからさ」

うつすらと汗を掻きながら、懸命にそれだけ言っで、カズマは大胆で歩き出した。

爽やかに晴れ渡った秋の午下がり、マヒロが小走りについてくる軽やかな足音が、耳に心地良かった。

しのびよる影

週末のキャバクラは、ハメを外した男たちで賑わっていた。よくもこんなに金とヒマを持て余した男たちが居るものだ、カズマはしらけたような目で、酔って騒ぐ大人たちを見ていた。

「カズくん、こちらにシャンパン一本入れてくれる？」

甘ったるい声で、ナンバーツのミキが店中に聞こえるようにオーダーを入れた。こうやって、客の競争意識を煽るのも、やり手のホステスのテクだそう。ミキの声をかわきりに、再び店内が活気づいた。もうそろそろバイト終了の時間だったが、この分では定時上がりは無理そうだった。

オーダーされたシャンパンとつまみを持って行くと、ミキのテーブルになぜかアユミの上客が居た。清潔そうな身なりに、涼しげな目元をキリリと引き立てる縁無しメガネ。確か女性議員の秘書をしていると言っていたっけ。

カズマは興味をそられて、ボックス席の背後の壁際に立った。近くのキャビネットを整理するフリで、客とミキの会話に耳を傾ける。

「ボクはあの女議員にいつも奉仕させられてるんだよ」

「だからこうやってプライベートではハメをはずしてるのね」

男性はかなり酔っているようだった。ミキの滑らかな太ももに手を置いて、男は注がれる酒を一気に煽った。

「でも、新婚なんでしょう？ 奥さん寂しがってるんじゃない？」

アユミと同じ事言うな！ と、男は不機嫌そうに言って、ミキの太ももをピシヤリと叩いた。カズマは思わず割って入ろうかと思い、一歩動いたとき、誰かに腕をつかまれた。

「あ……」

人差し指を唇に当てたツヨシが立っていた。

「騒ぐな、ミキなら大丈夫だ」

カズマはツヨシと並んで男性客の会話に集中した。

男性は「ははは」と笑い、ミキのこめかみにチュツとキスして無礼を詫びた。

「キミみたいに大人ならよかったんだけど、あいにくウチのは子供でね。男を喜ばせる事は何ひとつ知らないんだよ」

「あら、じゃあなおさら、しこみ甲斐があるじゃない」

ミキが含み笑いをする。男性は苦々しげな顔をすると言った。

「冗談は止めてくれ。何でボクがそんな事までしなきゃならないんだ？」

ミキはキョトンとした。

「だって、奥さんでしょう？」

「妻と言ったって、形だけさ。あの女議員の都合だよ。ボクとの関係がすっぱ抜かれた途端に、知り合いの娘をボクに押し付けて、今すぐ婚姻届を出せってね」

「まあ、ひどい！」

ミキの相槌に気を良くしたのか、男性はべらべらと口頃のうつぶんを吐き出し始めた。

「だから、結婚に愛なんか無いのさ。カモフラージュだよ。新婚はやほやの秘書が、上司である独身女性議員に手を出すはずもないってね。あの女、いいタマだ。散々ボクにベッドの相手をさせたくせに」

「でも、奥さん一人で家にいるのでしょうか？愛が無くても、なんだか可哀想じゃない？少しは構ってあげたら？」

カズマが興味を無くしてその場を離れようとしたとき、男性の口から思いがけない名前が飛び出した。

「……ああ、構ってやらなくてもいいんだよ。そのほうが、マヒ口も気が楽だろう。初夜に抱いたときなんか、初めてだったから痛がつて……それから何度してやってもなじまない。アイツと居ると、ボクも疲れるんだ」

カズマはマジマジと酔っ払った男性を見つめた。

コイツが、マヒロの……！

カズマは両手の拳が白くなるほどに、強く握り締めた。

こんなサイテー野郎が、マヒロの夫！

胸がムカムカして、飲んだわけでもないのに吐き気が込み上げてきた。

こんなヤツが、マヒロを抱いてるなんて！

許せない！ 絶対に許せない！

カズマの様子に気付き、ツヨシが声をかけてきた。

「おいカズマ、どうした？ 気分でも悪いのか？」

ツヨシの声にミキと男性客が振り向いた。カズマはお客であるマヒロの夫をキツと睨み付けると、思わず捨てゼリフを吐いた。

「マヒロは、籠の鳥じゃないんだぞ！」

ツヨシの呼び止める声が聞こえたが、カズマは振り返らず、バーテンダーのコスチュームのまま深夜の街に飛び出して行った。

《桃井くん、今何してますか？ 私は編み物をしてます。桃井くんが走る姿を見てたら、私も何か始めたくなったの。不器用だから、失敗ばかりしてちつともはかどらないけど、出来上がったら一番に見せるね。月曜日は学校へ行けそうです。ではでは、おやすみなさい マヒロ》

深夜の街角で、カズマは携帯を握り締めた。

酔っ払って家に帰ったアイツは、マヒロを抱くのだろうか。

どうにもならない悔しさと切なさで涙が出そうだった。カズマはシャッターの閉まった弁当屋の壁にもたれかかると、ずるずると座り込んだ。夜空には見事な月が出ていたが、見上げるカズマの視界には何も映っていなかった。

朝練の途中から雨が降り始めた。グラウンドに出ていた生徒は大急ぎで引き揚げなければならぬほどの激しい降り方だ。

体育倉庫の屋根の下に駆け込んだカズマの頭にタオルがパサリと投げられた。

「台風、来てるんだよね」

ユキノが恨めしそうに屋根から落ちてくる雫を見上げて言った。彼女が口を利いてくれたのは、マヒロの弟に会った日以来だった。カズマはユキノのタオルで顔を拭くと、「サンキュ」と言っただけで返却した。

他の部員が体育倉庫にハードルやマットをしまつのを手伝いながら、ユキノはいつもの調子で言った。

「あの事、気にしないでね」

「え……？」

カズマは片付けの手を止めてユキノを見た。あまり悪そうな表情から、それが告白のことを言っているのだとようやく思い当たったが、カズマにとってそれは、もうとつくにどうでもいい事だった。

ユキノはタオルを首に引っ掛けるとニコツと笑った。

「修学旅行で、誘えばいいじゃん」

首をかしげるカズマに、ユキノは言った。

「札幌の自由行動。マヒロと二人になれるチャンスじゃない」

カズマは曖昧に微笑むと、ゆるゆる首を横に振った。

「アイツ、修学旅行行かないんだって」

「え、そうなの？ どうして？」

そんなの、こっちが聞きたいよ。

心の中にくすぶり始めた思いをもみ消して、カズマは会話を打ち切るように「お先」と言っただけで教室へ戻って行った。

久しぶりに見るマヒロの後姿だった。雨に濡れた髪を拭きながら席に座ると、本を読んでいたマヒロがチラリと肩越しにカズマを振り返った。ドキリとして固まるカズマに、マヒロは口の形だけで「お・は・よ・う」と言った。

外は憂鬱な大雨なのに、彼女の顔を見ただけで自然とカズマの口

元に笑みが浮かんだ。バイブにした携帯の受信メールを見て、さらに彼の表情が輝きを増す。

《お休みしている間の数学で、わからないところがあるので、昼休みに図書館で教えてもらえますか？ 待ってます。 マヒロ》

カズマは鼻歌を歌いながら、英語の宿題に取り組み始めた。チラチラと目を上げてはマヒロの小さな背中を眺めて彼女の存在を確認したりした。

学校にいる間は、マヒロは自由だ。誰のものでもない。

誰が聞いても勘違いも甚だしいと呆れるような、それはそれは勝手で、そして危険なカズマの解釈だった。

昼休み、カズマはもう一度マヒロのメールを確認した。教室を見回すと、すでに彼女の姿は無い。数学は数少ない得意科目の一つだったので、カズマは胸を撫で下ろしながらノートを手に立ち上がった。

「カズマ、タケシたちがDS持って来たから、対戦ゲームしようぜ」「わりイ、ちよつと……ぶ、部室行くから」

リクの誘いをドキドキしながらかわすと、カズマは図書館に向かってダッシュした。

昼休みの図書館は思ったよりも混雑していた。天気が雨だということもあるのかもしれない。カズマはゆっくりと館内を見渡した。ほとんどが三年生ばかりだったので、正直ホッとした。マヒロの姿を探していると、誰かが袖を引いた。いつの間に来たのか、マヒロがすぐ横に立っていた。

「こっち、来て」

彼女は小声で言うと、中二階への階段を上り始めた。

「ここ、上つていいのか？」

「うん、でも机が無いんだ。それにホコリっぽいんだけど」

本当にそのとおりだった。一段上るたびに細かなホコリが舞い上

がる。カズマは近くの本棚に目をやった。百科事典がずらりと並んでいる。インターネットが普及した今、百科事典を見る生徒など居ないのだろう。

マヒロはホコリを気にする様子もなく、少しでも明るいと思われる窓際の一画の床にべたりと座り込んだ。

古い美術の画集が並ぶその一画は、腰を下ろすと他からは完全に隔離されて見えなくなった。すぐにその事に気付いたカズマは急に胸がドキドキしてきた。マヒロは全く気づいていない様子で、布地の手提げ袋から数学の教科書を取り出してぱらとめくっている。カズマは自分のノートを広げながら、さりげなく尻をずらしてマヒロとの距離を縮めた。

女の子特有の甘い香りにくらくらする。

「あの、ここが良くわからなくて」

ふいに質問されて、カズマはマヒロの方に目を向けた。驚くほど近くに彼女の小さな顔があった。黒目がちの大きな瞳を見た瞬間に、もうカズマはセーブが利かなくなっていた。

激しい雨が腰高の窓を叩き、階下のざわめきが波音のように辺りに漂う。

マヒロの艶やかな唇を見ているうちに、ふっと北斗の端正な顔が脳裏をよぎった。

あの男が、この唇にキスするのだ。そう思うと、胸の中に熱を持ったどす黒いモノが渦巻き始めた。カズマの頭の中に、酔っ払った北斗がマヒロをムリヤリ抱こうとしているヴィジョンが浮かんだ。ベッドに押し倒されるマヒロ、その上にのしかかり、泣いている彼女の体を強引に開いてゆく男の図。

北斗を殴りたいと思う。今すぐにボコボコにしたい。たまらない。黒い熱が体中の毛穴から湯気を立ててあふれ出しそうだ。自分の負の感情をどうしたらいいのかわからない。

マヒロはそんな行為を望んでないんだ。今、マヒロはオレという。オレに向かって微笑みかけてるじゃないか。

顔を近づけて、カズマはマヒロの小さな唇にキスしていた。軽く触れ合うだけの口づけ。キスは初めてじゃないのに、初めてのときみたいに緊張した。

何が起きたのかわからない様子で、マヒロはぼんやりとカズマの顔を見上げている。

今、マヒロにキスしたのは、誰でもなくオレだ！

そのことを自分にもマヒロにもハッキリとわからせるために、今度は彼女の頬を両手で包み込むとカズマはありったけの思いを込めて口づけた。緊張のせいだろうか、歯がぶつかった。

「……ん……っ……」

思わず叫びだしそうな彼女の声を強引なキスで塞ぎながら、逃れようとする華奢な体をギュッと抱きしめる。合わせた唇から観念したようなマヒロの吐息が漏れた。すると、浄化されたように黒い感情が静まり、カズマの心を透明な水が満たしてゆく。

マヒロの体からふつと力が抜けたのを確認すると、カズマは唇を離して彼女の瞳を覗き込んだ。

「驚かせてごめんね。でも、これがオレの気持ちだから」

マヒロは涙目でカズマを見上げてしきりにイヤイヤをしている。彼女の云わんとしている事が手に取るようにわかった。

——ワタシハ ヒトノ ツマ デス

絶望的な思いに囚われながらも、カズマはマヒロをさらに強く抱きしめた。甘い香りのする耳元で吐息と共に囁く。

「マヒロが誰のもんでも、カンケーねえから。オレが一番お前の事好きだから。アイツなんかより、ゼンゼン本気だから……だから……」

言ってるうちに、カズマ自身も何かなんだかわからなくなってしまった。告白に対するマヒロからの返事は当然もらえず、カズマはハアハアと荒い呼吸を繰り返しながら、チャイムが鳴るまでずっとマヒロを抱きしめていただけだった。ただ、最後にマヒロが両腕をしっかりと背中に戻してくれたことだけは覚えていた。

五・六時間目のホームルームは、間近に迫った修学旅行のグループ分けなどだったが、マヒロの参加しない修学旅行など、今のカズマにとっては何の魅力も無かった。

学級委員があらかじめ用意した案に従って、速やかに議事が進行してゆく。

「じゃあ、見学のグループは今座っている席順で六名ずつとします」カズマは欠伸を噛み殺しながら、斜め前のマヒロをぼんやりと見ていた。席順にしたがってのグループ分けならば、当然二人は同じグループで四泊五日をずっと一緒に行動できたはずなのに。考えてみてもどうにもならないと諦めてウトウトし始めたとき、ふいに胸ポケットの携帯が震えてカズマは一気に覚醒した。

《マヒロが修学旅行に参加しないのは、旦那に「行かなくていい」って言われたからだって》

ユキノからのメールに、カズマは眉根を寄せた。いくら夫だからと言って、そんな事にまで口を出す権利があるのだろうか。

カズマは険しい顔のまま、斜め前の小さな背中を見つめた。

翌日も、昼休みを二人で過ごした。図書館の中二階は二人だけの秘密の隠れ家のようなだった。昨日とは打って変わって晴天の今日は、窓から暖かな光が差し込んでいる。本棚に背をもたせ掛け、並んで教科書を開く。昨日は勉強どころではなかったけれど、今日はマジメに数学に取り組むつもりでいる。

本気で好きになった女の子に、下半身主体のヤツと思われるのは、絶対に嫌だった。

カズマのノートをキレイな文字で写し取るマヒロをじっと見つめる。マヒロは本当に物静かな子だった。会話をすれば一方的にカズマが中心だったが、それでも一緒に居るだけで温かな空気を感じた。植物のようなマヒロの沈黙は、カズマにとってどこか心地良かった。マヒロと居ると疲れると言っていた、彼女の夫の神経が理解できなかった。

嫌なヤツを思い出しちまった……

こんなに近くに居るのに、婚姻という呪縛の糸で他の男とつながれている事が口惜しい。

ちょうどノートを取り終わったマヒロが顔を上げてお礼を言った。カズマはドギマギしながらノートを受け取ると、躊躇いがちにそつとマヒロの細い髪に触れた。一束すくい取って口づけると、マヒロは真っ赤になって顔を背けた。

「ゴメン……少しだけ、触れさせて欲しい」

返事も待たずに肩に回されたカズマの手を、マヒロは拒まなかった。

「おい、カズマ！ 昨日も今日も、どこに行ってたんだよ」

昼休みが終わって教室に入るなり、リクが背後からアームロックをかけてきた。

「部室だよ！ く、くるし……」

本当に息が詰まりそうで、慌てて振りほどこうとするカズマに、リクは妙な流し目で言った。

「さつきユキノに聞いたけど、お前部室に居なかったって言ってたぞ」

カズマは内心大いに焦りながらも「行き違いだろう。何か用事か？」と言って逆に問い返した。

リクはカズマを解放すると言った。

「用事があるのはオレじゃなくて、担任」

「え？」

カズマが振り向いたとき、タイミングよく後ろのドアから入ってきた担任が、小声で彼を呼んだ。

「カズマ、ちょっと話がある。一緒に来てくれ」

ざわめきの中、カズマは担任に付いて教室を出た。シンとした廊下を歩き、階段の踊り場まで来ると、担任は立ち止まってカズマに向き直った。

「実はお前が風俗店で働いているという情報が校長に直接寄せられたんだ」

カズマは思わず息を飲んだ。担任は彼の仕草で事実関係を敏感に読み取ったようだった。

「何か、事実と違っている所はあるか？」

「……ないです」

カズマは素直に認めるしかなかった。担任はため息をつくと言った。

「お母さんに連絡するけど、いいかな？」

「母は、知っています」

担任は怪訝そうな顔をしたが、「教室に戻っていいぞ」と言って職員室に行ってしまった。

カズマは教室に戻る気にもなれず、そのまま一階に下りて、非常口からふらふらと外に出た。どこまでも青くて高い秋の空が広がっている。カズマは校舎を回りこんで、先日ユキノと抜け出したフェンスの切れ目から学校の外に出た。行くあても無いので、このまゑ散々蹴りつけた街路樹の側に座り込むと、今後の身の振り方を考え始めた。

陸上部にはもう居られないだろう。退部するだけで済むかどうかはわからないが、部活に未練は無かった。つい先日までなら、全国大会出場が決まっている水村に申し訳ないと心から思っただろうが、例の理不尽なシゴキの一件で、もう水村に対しては何の後ろめたさも感じなかった。

妙に吹っ切れた気分で立ち上がったとき、数メートル先の曲がり角から黒塗りの乗用車が現れて、カズマの目の前で停車した。

いきなりの事にその場で突っ立っていると、後部の窓がスルスルと下がって、見た事のある顔がのぞいた。

「どこかでお会いしましたね」

縁無しのメガネをかけたイケメンビジネスマンは、間違いなくマヒコの夫だった。

「私の妻が、大変お世話になっているみたいですね」

カズマはギクリとして、一歩後ろに下がった。マヒロの夫・北斗氏は、形の良い口元に笑みを浮かべて言った。

「その節は、わざわざ私の妻に会いに家まで来てくださったのに、家の者が大変失礼をして、申し訳なかったです」

『私の妻』というフレーズを強調する北斗に、カズマは両手の拳をきつく握り締めた。黙ったまま睨み付けていると、北斗はバカにしたように言った。

「ところで、余計なお世話かもしれませんが、授業時間中なのに、こんなところに居てもいいんですか？」

カズマは言い返す言葉が見つからず、唇をキュツと引き結んだ。

北斗はカズマの顔を面白そうに眺めて言った。

「公立でもけっこうレベルの高い進学校だと聞いていたのに、残念です。平気で校則をやぶつたり、授業をサボつたりするような生徒が居るなんて、信じられませんね」

今の北斗の言葉で、カズマはようやく事態が飲み込めた。

「バイトの事、校長にチクツたのは、あんただな？」

カズマの物言いに、北斗は顔をしかめた。

「こんな不良の生徒と一緒にでは、マヒロも落ち着いて勉強などできないでしょう。やはり転校の手続きを取ったのは正解でしたよ」

カズマの瞳が大きく見開かれた。

「転校……？」

「マヒロはまだ何も知りませんが、ま、どのみち私が決めた事には逆らわないように躡しつていますからね。編入先が決まり次第、転校させます」

カズマが何か言おうと口を開きかけたのを遮って、北斗は冷たい口調で言った。

「……クラスメイトでも何でもなくなったら、もうマヒロに近付く理由は見当たらないでしょう」

こ、こいつ！

スルスルと閉まりかけた窓に、カズマは咄嗟に自分の腕をねじ込んだ。

「あんたさっき、マヒロの事、妻だって連呼したよな。なのにどうして彼女の事、所有物みたいに扱うんだ？」

カズマの言葉に、北斗はキョトンとした顔で首をかしげる。しまりかけた窓がスルスルと再び開いた。

「……キミはおかしな事を言うな。所有物みたいではなく、マヒロはまさに私のモノなんだよ。婚姻とはお互いがお互いのモノになるという、一種の契約だ」

カズマはぐつと言葉を詰まらせた。『婚姻』『契約』そんな単語に何だかとても重みを感じた。

「わかっていないようだから、ハッキリ言うておく。ボクは結婚に際して彼女に無理強いをした覚えは無い。婚姻届にサインをしたのもマヒロの意志だ。未成年の彼女を妻にしたことは、ボクにとつては少々計算外だったが、それでもボクなりの誠意は尽くしているつもりだ」

カズマは北斗をキツと睨み付けた。

「構ってもやらず、ただ閉じ込めておく事がアンタの誠意なのか？」

北斗は話にならないといった態度でカズマを見て言った。

「キミはどこに目を付けているんだ？ 結婚とは恋愛ごっこじゃないんだ。相手の人生を丸ごと面倒見る、それが結婚だ。ボクはマヒロに何不自由のない生活をさせてやっているし、義務教育でない高校にだってキッチンと通わせている。安全の為の送り迎えだって付けてやっているのに、どうもこいつも！」

彼は後部ドアを開けると、車の外に降り立った。

カズマはギョツとして一、二歩後ろに下がった。

「アイツが死んだような目をしてたって、これ以上ボクにどうしろっていうんだ！ ボクはやるべきことはやっているし、責任は果たしている！」

「で、でも……彼女の事、なんでもかんでもアンタが決めてしまう

のは、それは違っただろう？ 修学旅行だって学校の勉強の一部だ。それを行かなくてもいいなんて、アンタが決めるのはおかしいし、それに転校だって……」

何かがおかしいと思ったが、うまく言葉で言い表せず、カズマの声がだんだんと小さくなった。

黙って聞いていた北斗の目が鋭く細められた。ずいとい目の前に立たれて、カズマは息を飲む。北斗氏は、カズマより背が高かった。趣味の良い濃紺のスーツにはシワ一つ無く、清潔に切りそろえられた髪は、一筋の乱れも無い。完璧な成人男性の風格を漂わせて、北斗はカズマを見下ろした。

「まったく、物好きなヤツが居たもんだな。あまりに存在感が無くて、親にさえ十数年も忘れられていたような娘なのに」

北斗はさもおかしそうに「ハハハ」と笑って言った。カズマは怒りで真っ赤になった。

「マヒロをバカにするな！ あんた、店で彼女を愛してないって言ったよな。偽装結婚だって。それなら、婚姻届を出したことで、もう十分だろう？」

「どういう意味だ？」

北斗は怪訝そうにカズマを見下ろす。カズマはキツと彼を睨み上げて言った。

「愛してないって言ったクセに、どうして彼女を束縛するような事するんだ？」

「束縛？」

「訪ねて来た友達にも会わず、電話も禁止でその上修学旅行も行かせない。歯医者の前でマヒロが泣いてたのは、どうせ実家に帰ることも禁止しているからだろ？」

北斗はまだ唇の端を歪めて笑っていた。笑いながら右腕を突き出し、カズマの胸にグイと拳を押し付けて言った。

「束縛じゃない。ボクは心配性なんだよ。安心して通わせていた学校にさえ、人のモノを欲しがる、お前みたいな常識の無いガキが居

るのだからな」

「なに！」

「お前、マヒロが好きなんだろう？」

北斗は優越感を滲ませた眼差しでカズマを見下ろした。

カズマは胸に突きつけられた北斗の拳を払い退けた。相手が僅かによろける。北斗は冷たい目でカズマを睨みながら言った。

「何の取り柄も無いただの子供でも、マヒロは私の正式な妻だ。世間体というものがある。愛情云々の前に、貞操の問題なんだよ。言い替えるなら無知な妻に対する教育的指導だ」

カズマはフツと口の端を歪めた。

「何が教育的指導だ！ 貞操が聞いて呆れるね。自分はキャバクラ通いの拳句にキャバ嬢買ってるくせに」

言った途端に胸倉を掴み上げられて、カズマは身を硬くした。どうやら触れてはいけない部分に触れてしまったらしい。北斗は引きつった顔で放り出すようにカズマを突き飛ばした。

「口を慎め！ 社会の厳しさの何たるかもわからない、ぬるま湯に浸かったガキのくせに！ 愛だの恋だのと、そんなくだらない事ばかりにうつつを抜かしてる青臭いヤツに、ボクのプライベートをとにかく言われる筋合いは無い！」

北斗は言っているうちに、何やら興奮状態になってきたらしい。

肉の無い白い頬に赤みが差した。

「アユミも、ツヨシも……その上こんなガキにまで！ 口を開けば皆してマヒロが可哀想だという。いいだろう、ボクだってそんなに見の狭い人間じゃない。修学旅行ぐらいは行かしてやるさ。ただ

……」

北斗はメガネの奥の目で探るようにカズマを見た。

「ボクの目の届かない所で、マヒロに妙なマネをしたら、法的措置をとらせてもらうからね」

「妙なマネって、何だよっ！」

カズマはカチンときて声を荒げた。少しばかり後ろめたいだけに、

怒鳴った声が震えた。

「お前はあまり頭が良さそうじゃないから、もう一度言っ。愛情があるうと無かるうと、マヒロはボクの妻だ。その事はマヒロも十分承知しているはずだ。にもかかわらず、お前が妙な事をすれば……それはすべてマヒロの責任だ！」

豹変したように声を裏返して怒鳴った後、北斗は憤然として乗用車に乗り込んだ。自動ドアなのに思いつき叩きつけるようにして後部ドアを閉める彼を、カズマは呆然として見つめるばかりだった。

放課後、カズマは校長室に呼ばれた。担任と共にソファに座っていたのは、母親ではなく従兄のツヨシだった。

身内の商売を手伝っていたという、特別な事情を考慮されて、カズマは今回お咎め無しということになった。

校長室を出たツヨシは、カズマに向かって深々と頭を下げた。

「カズマ、迷惑かけてごめん」

「別に、いいよ」と笑うカズマに、ツヨシは激しく首を横に振った。「オレ、自分の商売には誇りをもってるけど、やっぱり世間からは認められてないんだって……何ていうか、ちよっと、ヘコんだっていうか……」

カズマは前を歩くツヨシの広い背中を見ながら先程の北斗の言葉を思い返していた。

—— 社会の厳しさの何たるかもわからない、ぬるま湯に浸かったガキのくせに！

「大人になるって、何だか大変だな」

「え？」

ツヨシが何事かと目を丸くして振り返った。

「……マヒロの旦那も、大変なのかな」

つぶやくカズマに、ツヨシは労るような目を向けただけだった。

翌日の昼休み、また図書館で過ごす約束をしたにもかかわらず、

マヒロは現れなかった。

都合が悪くなったのかもしれないと思いメールしたが、返事は返ってこなかった。まだ昼休み中だったが、教室に戻ったカズマはぐるりと室内を見渡した。マヒロの姿は無い。

仕方が無いので自席に座って五時間目の教科書を出そうとするとメモがひらりと落ちた。

『桃井くんゴメンナサイ。もうお昼休みに会うのは止めます。携帯で連絡したかったのですが、トイレに落として壊れてしまいました』

無記名だったが、マヒロの文字だった。

会うの止めるって……？

いきなりの事に納得できなかった。予鈴が鳴ってもマヒロは現れない。ようやく彼女が戻ってきて席に着いた時には、ほとんど同時に前のドアから五時間目の先生が入ってきてしまい、声をかけるタイミングは無かった。

何とか話をしたくて見計らっていたが、マヒロはわざとそうしているように、カズマの方を振り向くことは無かった。

授業が全て終了したので、思い切って堂々と声をかけるつもりで腰を浮かしたカズマを、ユキノが呼び止めた。

「カズマ！ バイトの事、聞いたよ。部長が激怒してるって、知ってる？」

「ああ、あの件なら、もう片付いてんだけど」

ユキノと話している間に、マヒロはもう姿を消していた。カズマはため息をついた。

「『オレに対する嫌がらせのつもりで、わざとそんなところでバイトしてたに違いない』って、水村さんが、そう言いふらしてるらしいよ」

「ばかばかしい！」

カズマは吐き捨てるように言うと、カバンを掴んで立ち上がった。

水村の事も、マヒロの夫も、そして今日のマヒロの態度にも、全てに腹が立った。

部室とは逆方向へ走りだしたカズマに、ユキノが慌てて声をかけた。

「ちょっと、どこいくの？ 部活、出ないの？」

ユキノを無視して、カズマは全速力で廊下を駆け抜けた。

昇降口を出たところで、校門に向かって小走りに走るマヒロを発見した。門の外にはいつものとおり黒塗りの車が横付けされている。

「マヒロ！」

辺りもはばからず、大声で呼び止めたカズマの声は、マヒロにも聞こえているはずだった。彼女は後姿のまま一瞬ビクンと肩を震わせたが、すぐに歩みを速めてそのまま迎えの車の後部シートに滑り込んだ。

「ちくしょう！」

走り出した車を、カズマは全速力で追いかけていった。短距離走で県大会準優勝の成績は伊達ではない。あっという間に追いついたカズマは走る車のトランクをバシバシと叩いた。運転手はさすがに危険を感じた様子で、すぐにハザードを出すと路肩に停車した。

後部ドアの窓ガラスを乱暴に叩くカズマを困ったように見つめてマヒロは、あきらめたようにするとウィンドウを下ろした。

「マヒロ！」

首を突っ込んだカズマを手で制して、マヒロは運転手に向かって言った。

「すみません、彼と少しだけ、話をさせてください」

運転手はカズマとマヒロを乗せて、学校から少し離れた住宅街の中の公園の近くに車を停めた。二人を車内に残したまま「三十分したら戻ってくる」と言い置いて運転手は車を降りた。彼の姿が見えなくなると、マヒロは消え入るような声で謝罪した。

「謝るくらいなら、すっぱかすな」

カズマは怒ったフリをして、マヒロの反応を伺った。マヒロは泣

きそうな顔で俯いている。もういじめるのは止めにしようと思い、彼女を抱き寄せようと手を伸ばしたとき、マヒロが言った。

「あの人……北斗さんは、悪い人じゃないの。だけど、とても厳しい人。自分にも、他人にも。私は結婚をするとき、彼の言うとおりにする代わりに、不自由の無い生活を約束してもらったの。それを違える事は、許さないって言われた」

カズマはマヒロの肩を抱こうとしていた手のひらを、ギュッと握り締めた。震える唇から、思わず言っではいけない言葉が滑り出す。「どうしても好きでもない男と結婚なんてしたんだよ！　どうしても、そんなバカみたいな事、したんだよ！」

俯いたマヒロの目元から零れ落ちた涙が、彼女の紺色のスカートに大きなシミを作った。

「……桃井くんにはわからない。誰かに依存するしかない、そんなお荷物みたいに暮らしてきた人間の気持ちは、絶対にわからない」
「マヒロ、何言ってるんだよ」

マヒロはしゃくり上げながら、ささやくように言った。

「お父さんが亡くなって、小さいときに私を置いて出て行ったお母さんを頼らなきゃいけなかった……。私を見たお母さんの顔が忘れられない。まるで幽霊を見たような顔だった」

マヒロの弟が言っていたっけ。確か二年前に三井家に突然現れたマヒロのことで、大騒ぎになったと。

「三井の家に、私の居場所は無かった。だから私はなるべく居るか居ないかわからないように大人しくしてるしかなかった。でも、義父はそれなりに誠意を尽くしてくれた。それは義父の計算づくの誠意だったけれど」

「計算？」

「歯科医師会の幹部になる為に、国会議員の関係者と親戚づきあいをする必要があるの、三井の籍に入れてやるからすぐ嫁に行ってくれないかと言われたわ」

カズマは絶句した。

「母は初めて私のために泣いて反対してくれたけど、その時の私は結婚の意味も深く考えられなかった。どこに居ても同じだと思っていた。……私って、本当にバカなのよ」

マヒロは涙を溜めた瞳を真っ直ぐカズマに向けた。

「私ね、誰かに気にしてもらったり、ましてや好きだなんて言ってもらった事、今までに一度も無かったの。だから、とても嬉しかった。……ありがとう」

カズマは険しい顔でマヒロを見た。まるでこれじゃあ一方的な別れ話のように感じる。

「ありがとって……それだけかよ！」

マヒロは俯いたまま黙り込んだ。車内のデジタル時計は無情に時を刻んでゆく。マヒロが観念したように重い口を開いた。

「北斗の家に泥を塗るようなマネをするなって。……北斗さんは、学校での私の行動にも目を光らせているらしいの」

「え？」

「誰かに頼んで、私とあなたの行動を見張らせているみたい」

カズマの背筋に冷たい汗が流れた。図書館での秘密の逢瀬は秘密じゃなかったという事だ。

「今日、体育の間に、私の携帯がバケツの水に沈められてた」

マヒロは震える唇で、とぎれとぎれに声を絞り出した。

「次に沈めるのは携帯じゃ済まないって、メモがあって……。私に関わると、桃井くんに迷惑がかかるから。北斗さんは……そういつたこと、必ず実行するような人だから」

カズマは豹変したように自動車のドアを閉めた北斗を思い返した。

北斗……。危ない男。

怯えた目で見上げるマヒロの様子からしても、自分が判断した北斗という男に対する評価は、決して大げさではないのだろう。

三十分時間をやると言ったくせに、遥か前方にもう運転手の姿が見えた。カズマは涙で濡れたマヒロの頬に優しいキスをすると言った。

「オレも、マヒロに負けず劣らずバカなんだ。だから、お前の事ぜ
つたい諦めないから」

「桃井くん……！」

「オレがお前を自由にしてやる！ アイツの籠から、出してやるか
ら！」

運転手が来る前に、カズマは後部座席から降りると、振り返らず
に走り出した。

女友達

朝日が差すグラウンドは、清々しい秋の空とは対照的に、険悪な空気が満ちていた。昨日無断で部活をサボったカズマに対して、水村部長は特別メニューを課した。

「今日から一週間、朝と放課後だけでなく、昼休みも走れ。千五百を三本ずつだ。その他の練習は今までどおりだ」

短距離走者の自分に中距離の練習は意味が無いように思ったが、文句を言うのは止めにして、カズマはただ黙って頷いた。いつになく大人しいカズマの態度に拍子抜けしたと見えて、水村はいくぶん声のトーンを和らげた。

「単なるシゴキだと言うやつも居るが、お前は中距離でも記録を出せるとオレは本気で思っている。余計な事を考えず走る事に集中しろよ」

カズマは一礼すると一人でランニングを始めた。走る事に集中など出来るはずも無い。気がつけばマヒロのことばかり考えている始末だった。メールは出来なくなってしまう、直接会話する以外、コミュニケーションの方法は無い。カズマは一向に構わないと思っていたが、普段誰とも会話をしないマヒロにとって、やはり皆の前で自分と会話するのは嫌に達いないと思った。それに、自分たちを監視しているらしい「誰か」の存在が大いに気になった。

北斗に報告したければ、勝手にすればいい。

カズマはトラックを回りながら徐々にペースを上げていった。

教室に入るなり、カズマはギョツとしてマヒロに駆け寄った。彼女は顔半分が隠れるくらい大きなマスクをしていた。

「どうした？ 具合、悪いのか？」

カズマの問いに、マヒロは激しく首を横に振り「何でも無いの」と言った。尚も心配するカズマから顔を背け、マヒロは小声で言った。

「桃井くん、皆が見てるから……。席に戻って」

カズマはぐるりと周囲を見渡した。マヒロの言うとおり、何人もの目が二人を見ていた。この中に北斗のスパイが居るのだろうか。そう考えると、何だか無性に腹が立ってきて、気がつくとかズマは立ち上がって大きな声で怒鳴っていた。

「見てんじゃねえよ！ マヒロが人妻だからって、別に話しかけたっていいだろ。クラスメイトなんだから！」

言いたいことを言って、座ろうとした拍子に椅子が倒れた。完璧にクラス全員がカズマに注目していた。

リクがへらへら笑いながら「ヒューツ」と口笛を吹くと、数人の女子がクスクスと笑って額を寄せ合った。カズマは眉根を寄せてクラス中を見回した。何だか今までと全く違う空気を感じた。こんな事は初めてだった。

チラリとマヒロを見ると、彼女は小さな体をいつそう小さくして震えていた。

背後に気配を感じて振り向くと、ユキノが倒れた椅子を直してくれている。ユキノはカズマの肩に顔を寄せ、彼にしか聞こえない声で囁いた。

「カズマ、あんたが構えば構うほど、それはマヒロにとって迷惑なんじゃないかと思うけど？」

「どういう意味だ？」

眉間にシワを寄せるカズマに、ユキノは「救いようが無いね」と言って肩をすくめると自席に戻った。

ユキノの言った言葉をようやく理解できる事件が起こったのは、数日経ってからだった。

昼休み、水村に課せられた特別メニューをこなし、汗を拭きながら帰って来たカズマは、マヒロの姿を見て首をかしげた。

マヒロは四時間目に着替えたジャージのままで座っている。顔には相変らず大きなマスクをしたままだった。

カズマはマヒロの背中をつつくと声をかけた。

「なんで、ジャージ？」

振り向いたマヒロの目は真っ赤だった。カズマはギクリとして身を引いた。マヒロは何も言わずに背を向けると、午後の授業の教科書を並べ始めた。カズマは何となく声をかけづらくなって、そのまま口を閉ざした。

放課後逃げるようにして教室を出てゆくマヒロを尾けて行き、校門の手前で捕まえた。

「放して、お願い！」

本気で抵抗するマヒロを抱えるようにして、カズマはひと気の無い体育館の裏に彼女を引きずって行った。マヒロは寒くもないのにガタガタと震えていて、しきりに辺りを見回している。何だか目つきがおかしかった。カズマはマヒロの肩をつかむと、なだめるように声をかけた。

「マヒロ、何怯えてるんだよ。オレがお前に乱暴するはずないだろう？」

マヒロは今初めてカズマを見つけたような顔をした。彼女の手から、学生カバンと共に紙袋がバサリと落ちた。何気なく目をやったカズマは、紙袋からはみ出したモノに目を奪われた。

「あ……」

マヒロが手を伸ばすより先に、カズマは袋からはみ出た彼女のブラウスを手に取った。

背中の部分に赤いマジックで文字が書かれていた。

『男好きのインラン女　ブス　死ね　サッサと子供でも産んでろ！
学校来るな』

マヒロはその場に座り込むと泣き出してしまった。カズマはどうして良いかわからず、ひどい中傷の書き付けられたブラウスを握り締めて突っ立っていたが、ふいに思い当たり、彼女の顔を覆う大きなマスクに手を伸ばした。

「ダメッ！」

泣きながら慌てて顔を隠そうとするマヒロの前に跪き、カズマは彼女の顔を覗き込んだ。

もったいぶ腫れは引いていたが、彼女の唇には切れた痕があった。
「北斗に、殴られたのか？」

マヒロはとうとう地面に突っ伏してしまった。マヒロがマスクをしてきた日の事を思い返した。あれは確か、車の中で彼女と会話をした次の日だったと記憶している。運転手から話が行ったのだらうと想像がついた。

カズマは無意識に周囲を見回した。誰も居ない事を確認すると、突っ伏して泣いているマヒロを抱き起こして、そのままギュッと胸に抱きしめた。マヒロは無言で狂ったように抵抗してきたが、カズマは彼女の髪を撫でながら、耳元で優しく囁いた。

「大丈夫、誰も見てないから」
「本当に？」

上目遣いで訊ねるマヒロに頷くと、カズマは彼女の切れた唇にそっと唇を重ねた。マヒロは震える指先でカズマのシャツの胸元を握り締めた。

——ドメスティックヴァイオレンス、夫婦間虐待——

そんなDV夫の居るあの家にマヒロを帰したくなかった。

「マヒロ、あんなところ出ちまえよ。オレのところに来い」

マヒロは黒目がちの瞳を大きく見開いてカズマを見上げた。

「うちの母ちゃん、結構話わかる人間だからさ、きつと話せば力になってくれると思うし」

マヒロはふっと目を伏せると、カズマの腕から身を引いた。地面に落ちているブラウスを紙袋に押し込みながら、マヒロはハッキリと言った。

「逃げたって、ダメなもの。結婚しちゃってるんだから、どうにもならないことぐらい、桃井くんだって、わかってるよね」

立ち上がってカズマを見下ろしたマヒロの目は切なげだった。マヒロは涙を拭くと、懸命に笑顔を作って言った。

「修学旅行、行かせてもらえるようになったから。それが今の私の楽しみなんだ」

逃げるようにカズマの脇をすり抜けたマヒ口を引き止めることも出来ず、カズマは無力感に囚われたままその場に座り込んでいた。

マヒ口に対する、誰ともわからぬ陰湿なイジメはその後も度々あった。それは決まってカズマの居ない昼休みに起きているようだった。物が無くなったりする程度は、子供じみた嫌がらせの範囲だろうと思ったが、ずぶ濡れでトイレから出てきた彼女を見たときにはもう黙ってはいられないと思った。体操服を掴んで女子更衣室へ走ってゆくマヒ口の後姿を見ていたカズマは、通りかかったユキノを捕まえた。

今しがた目撃した事を話すと、ユキノは驚いたような顔になり、すぐにマヒ口の後を追ってくれた。

数分後、ユキノは一人で戻ってきて、マヒ口は保健室で休んでいると言った。

「いったい、何があったんだ？」

「よくわからないけど、トイレに入っていたら外からドアを押さえられて出られなくなっただんですって。それで暫くしたら上からホースで散水されたって……」

カズマは爪を噛んでいたが、やがてユキノに向き直ると小声で訊ねた。

「誰がやってるか、知ってたら教えてくれ」

ユキノは顔をしかめると、小声で言った。

「私は知らないよ。はっきり言って、捜す気も無いし。だけど、今回の犯人捕まえたからって、イジメが無くなるとも思えないんだけど」

「どうして？」

首をかしげるカズマに、ユキノはため息混じりに言った。

「彼女がいじめられる原因は色々あると思うけど、その一つがアン

タなんだよ」

「え？」

「結婚しているくせに、学年で一、二番人気のカズマにまで色目使ってるってさ」

な……！ カズマは絶句した。何とか言葉を絞り出す。

「色目って……じゃあオレがお前としゃべっていると、ユキノ、お前もいじめられるのか？」

バカじゃないの？ と、ユキノは鋭い流し目で睨み付けた。

「あの子大人しいから、絶対に抵抗しないって思われて、それで相手が調子に乗るんだ。女子のイジメって、大抵そういう流れでエスカレートするのよ」

お手上げ状態だった。何とかしてやりたいと思うカズマの行動は、ことごとくイジメという形でマヒロに降りかかる。たとえ学校に来なくても、北斗の耳に入れば、マヒロは教育的指導の名の下にあの家で暴力を振るわれるのだろう。

彼女を守ってやる事は出来ないのか？

修学旅行が楽しみだと言っていたマヒロ。来週に迫ったそのイベントだけは、楽しく過ごさせてやりたい。カズマはユキノに頭を下げて言った。

「なあ、ユキノ。お前に頼む筋合いの事じゃないけどさあ、修学旅行でマヒロがいじめられないように、それとなく見てやってくれないかな」

ユキノの目が大きく見開かれた。

「カズマ……あんた、何言ってるのかわかってるの？ 私、あんたに告こったんだよ？ その私に……！」

呆れて言葉を失くすユキノに、カズマは再び頭を下げた。

「だから……お前には悪いと思ってるよ。だけど、オレがいくら庇っても、庇いきれないし……てゆうか余計に逆効果だって、お前だった今、言っただじゃないか」

昼休み終了を告げるチャイムが鳴った。ユキノはふくれっ面をし

たが、やがていつもの調子に戻って渋々頷いた。

「わかったわよ。友達の頼みは断れないからね」

「頼むよ、アネゴ」

手を合わせて拝むカズマにデコピンを一発食らわすと、ユキノは自席に戻って行った。

カズマの頼みどおり、ユキノは修学旅行に向けて出来るだけ手を尽くしてくれたようだった。『旅行のしおり』を手にしながら、カズマの横で弁当を食べていたリクがポツリと言った。

「ユキノ、一生懸命だったぜ」

「え？」

カズマは箸を休めてリクの手の中のしおりを見た。男女別の部屋割りのページだった。

「もう、原稿とかも出来ちゃったところに、マヒロと同じ部屋にしてくれて頼み込んで、クラス委員から文句言われたり、部屋を代わる為の相手にも頭下げてさ」

カズマは窓際の列に固まって弁当を食べている女子の集団を見た。その中にマヒロはいなかったが、中心には笑顔でおしゃべりに興じるユキノが居た。カズマは笑顔のユキノのから目を背けた。彼女の好意に甘えて、いいように利用している自分が堪らなく嫌なヤツに思えた。

「ユキノには……そのうちオレに出来る範囲で精一杯の礼をするよ」
リクは冷めた目でカズマを見て言った。

「バカだな、カズマは。オレだったら、さっさとユキノを彼女にするけどな」

部活を終えてから、カズマは久しぶりに繁華街のキャバクラに足を向けた。「スマイル」でのバイトは、学校にバレた時点で辞めさせられていた。

ピンクの看板を掲げた雑居ビルの裏にある従業員通用口から中に

入ると、店で一番人気のアユミと店長のツヨシのキスシーンに出くわして、カズマはうろたえた。

「なんだ、カズくんか。びっくりした」

言葉のわりには全く慌てた様子も無く、アユミはツヨシの腕からするりと抜け出して店へと続く扉に消えた。

「に、兄ちゃん……ゴメン」

「バ、バカヤロウ。妙に気を回すな。あんなの、挨拶だ」

ツヨシは赤くなりながら事務机のある一画へと歩いて行った。

「ツヨシ兄ちゃんとアユミさんって、恋人同士だったの？」

カズマはニヤニヤしながらツヨシの後にくつついて歩いて行った。ツヨシは迷惑そうに振り返ると用件を言うように促した。

「北斗さんの事、知りたいんだけど」

ツヨシは端正な顔に険しい表情を浮かべてカズマを見た。

「何が知りたいんだ？」

「アイツが、奥さんを……マヒロを殴る理由」

ツヨシは一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに無表情になると、ポケットからタバコを取り出して事務机の椅子に座った。壁際に立てかけてあるパイプ椅子を目で示し、カズマに座るように身振りで示すと、彼は啞えたタバコに愛用のジッポで火をつけた。銀色に何かブランドのようなロゴが入っている。そういったさりげないおしゃれな小物はツヨシによく似合っていた。

ゆらゆらと立ち昇る白い煙を見ながら、ツヨシは記憶を手繰るように話し出した。

「アイツは北斗の家の養子なんだよ。高校二年のときに苗字が変わったんだ」

母と妹と三人暮らしだったという北斗は学校一の秀才だったらしい。ただ、金に苦労をしていて、大学受験の関係で養子の話に乗ったのではないかとのことだった。

「北斗の家は代々政治に縁がある家柄らしくてさ、アイツの場合頭が良くて政治にも興味を持っていたから、息子として、というより

あの女代議士の一族を補佐する為に選ばれた戦力だったんじゃないかと思うんだ」

「女代議士？」

「そう、アイツが今秘書をしている独身女性政治家。北斗の家はその政治家の家と関わりが深く、代々つるんでは甘い汁を吸ってきただけだよ」

正義感が強く、純粋に政治に傾倒していた北斗青年にとって、腹黒い政治家たちとの付き合いは相当のストレスになったんじゃないかと、ツヨシは言った。

「あの女代議士がきちんとやれてるのは、たぶんアイツがそばにいるおかげだとオレは思うね」

カズマは腑に落ちない顔で言った。

「だからつてさ、ストレスを妻への暴力で解消するなんて、やっぱりおかしいよ」

ツヨシも首をかしげた。

「それなんだけどさ、アイツの妹がちょうどお前と同じくらいの歳なんだよな。つてことはマヒロさんと変わらないくらいだろう？」

北斗はそりゃ妹思いの男だったから、そのDV夫っていうフレーズが、どうも納得できないんだよな」

カズマは難しい顔のまま「スマイル」を出た。北斗という男が、どんなに嫌なヤツなのか確認したくてココまで来たというのに、何だかますますわからなくなってしまう。彼の弱味の一つも聞けるかもしれないなどと、ツヨシを訪ねたが、逆に今の自分と同じ年の頃の、彼の苦労話を聞かされてしまい、先日言われた事が、かなりの重みでカズマの頭にのしかかってくるだけだった。愛の無い結婚を選択せざるを得なかったのも、養子ゆえの苦渋の選択だったのかもしれない。その彼が、キャバクラでハメを外し、女を買って何が悪いのか。

やべえ、これじゃあ、オレ、まるっきりアイツの味方じゃないか！
ため息をついて佇むカズマの周囲は、夕闇が色濃く深まり、赤や

ピンクのネオンが目立ち始めていた。もうあと半時もすれば、この
界限は娯楽を求める大人たちで活気づく。補導されないうちに、早
く家に帰ろうと思いき出したとき、声を掛けられた。

振り向くと、従業員通用口からアユミが顔を出していた。アユミ
は後ろ手にドアを閉めると、カズマをチヨイチヨイと指で呼んだ。
「参考になるかわからないけど、カズくんだけに教えてあげるね」
ツヨシには絶対に言わないでね、と口止めして、アユミは意外な
ことを教えてくれた。

「私をお持ち帰りした日、ホテルで二時間、私と彼何してたと思う
？」

ホテルでする事といえば一つしかないだろう！ そう思いながら
も、カズマは顔を赤らめて首をかしげるに留めた。

「ワインを飲みながら話をして、それから要求された事が……」

カズマはゴクリと唾を飲み込んだ。アユミは悪戯っぽい顔でカズ
マの様子を見て楽しんだ後、言った。

「……膝枕」

「はあ？」

カズマの頭に激しく？マークが飛んだ。

「二時間……膝枕？」

「そう、二時間、膝枕。でもけっこうなお金もらってさすがの私も
心苦しかったから、抱いてもいいわよって言ったの」

「で、どうしたの？」

カズマはドキドキしながら訊ねた。

「あっさり断られちゃって、プライド傷ついたわ。だから、ツヨシ
には言わないでね。色気が無いからだって、笑われそうなんだもの」

アユミの話を聞いて、カズマはますます混乱してしまい、頭を抱
えて家に帰った。

修学旅行の夜に

修学旅行当日、羽田空港に集合した生徒たちは、皆浮き足立ち、教師はピリピリしていた。第一の難関は集合時間だった。毎年必ず一名や二名は遅れるヤツが居るのだ。学校側もそれを見越して飛行機の時間より随分と早めに集合時間を設定していたが、今回はそれがかえってアダとなったようだった。三 クラス一五人の生徒は皆マジメで、時間きっかりには全員集合していた。

「おいおい、あと一時間もあるのかよ。ゲーム持ってくればよかったなあ」

少し伸び始めた坊主頭をぐるぐると手で撫でながらリクがため息をついた。カズマはリクのぼやきに相槌を打ちながら、マヒロの姿を探した。

珍しい事にマヒロはユキノとツーショットで写真撮っていた。ユキノのおかげか、マヒロへの目立ったイジメは無くなっているようだった。マヒロはこれまた珍しい事に、カズマの視線に気がつく小さく微笑んで手を振った。カズマはびくりして手にしていた缶コーヒを落としそうになってしまった。修学旅行を楽しみにしていると言っていたマヒロは、本当に嬉しそうだ。彼女の笑顔を見るのは久しぶりで、カズマも思わずつられて笑顔になった。

「あーあ、鼻の下伸びちゃって。人妻に夜這いをかけようなんて、思ってないよな？」

心の奥底を見透かされたようなリクの言葉にドキリとして、カズマは思い切り目の前で揺れる坊主頭を叩いた。

今回の修学旅行のメインは、世界自然遺産に指定されている知床の見学だった。しかし、生徒たちの間での話題はもっぱら最終日前日の札幌自由行動だ。朝食を食べて札幌駅で解散してから、夕食も自分たちで食べて、夜八時までにホテルに戻るといふ、今どきの学校にははえらく放任主義のスケジュールに、生徒たちのテンシヨ

ンは嫌が上にも盛り上がった。

「なあカズマ、札幌ん時どーすんの？」

リクがチラリと女子の集団に目を走らせて訊ねた。希望としては、当然『マヒロと二人で札幌市内観光』だったが、そんな約束はまったくしていなかった。学校と家、両方でイジメにあう彼女が可哀想で、学校でもプライベートでも、カズマはほとんどマヒロに近付けない状態だった。見学のグループが一緒だということを唯一の希望にして、カズマはこの旅行に臨んでいる。今のところはまだ話すチャンスはないけれど、札幌までに必ず誘うつもりでいたので、カズマはリクに言った。

「わりイけど、札幌は別行動させてもらうよ。……たぶん」

リクはニヤリと笑って肩をすくめただけだった。彼の仕草は、応援しているというより、呆れ果てているといった感じであった。

四泊五日のスケジュールは滞りなく過ぎていった。二日目の夜、隠れて飲酒をしていた数人の生徒が、教師に見つけられてこつてりと絞られたらしいと聞いた。それ以外は平和そのものだった。

知床の海を巡る観光船を待ちながら乗り場近くの土産コーナーを見て回っていると、一人で絵葉書を手に取るマヒロを見つけた。カズマが頼んだからか、旅行中マヒロはいつもユキノと一緒にだったので、今日ココで一人で居る彼女を見つけたのはカズマにとってラッキーだった。

他のクラスの生徒たちをすり抜け、カズマは素早くマヒロに近付いた。

「マヒロ」

声をかけるとマヒロは驚いたように目を丸くし、チラチラと周囲に視線を配った。そんな彼女の様子に、カズマの胸がズキリと痛む。

「オレが声かけると、メーワクか？」

カズマは苦笑しつつ近くのガイドブックを手に取った。

「こ、ごめんなさい……」

「すぐ謝るなっつーの」

ニツと笑うと、マヒロもつられて白い歯を見せた。手近な土産物に手で触れながら、カズマは札幌の自由行動にマヒロを誘ってみた。「その日は、ユキノちゃんが一緒にどうかって、声かけてくれて……」

「返事、したのか？」

マヒロはフルフルと首を横に振った。

「んじゃ、決まりな」

マヒロは困ったような顔をして小声で言った。

「でも……ユキノちゃんに悪いから……」

カズマはニコツと笑って言った。

「ユキノなら大丈夫だよ。オレから言っとく」

「え？」

「ユキノとリクはオレとマヒロのこと、応援してくれてるから」

マヒロは心底驚いた顔をした。

「それ、本当なの？」

カズマは大きく頷いた。

土産物売り場に学生たちを呼び戻すアナウンスが流れる。「んじや！」と手を振って、カズマは先に栈橋の集合場所に戻って行った。

知床のカモメは人馴れしている。観光船の周りを追いかけるように飛び回り、学生たちの手から直接カツパえびせんを奪い取ってゆく様子にリクがぼやく。

「世界自然遺産！ 地球に残された楽園、知床の大自然！ って、ウソじゃん。なんだよこの人を舐めきっているカモメの態度！」
「まさにカモメの楽園だ」

二人はゲラゲラ笑った。マヒロのOKをもらえた事でカズマのテンションはハイだった。カズマは観光船の客室から甲板に出てきたユキノを見つけると、手まねきした。

風に髪をなぶられながら近寄って来たユキノに、早速マヒロを誘

った事を報告した。

「へー、良かったじゃん」

ユキノはいつものサツパリした口調で言うと、リクの坊主頭に力ツパえびせんを一つ乗せた。すかさずカモメが襲ってきて、リクは悲鳴を上げた。

こんな風にリクとユキノと三人でバカやるのも久しぶりで楽しかった。ひとしきり笑い合った後、ユキノがカズマをリクから引き離して甲板の隅へ連れて行った。ユキノはカズマの手を取ると、見慣れぬカードを乗せた。それはキャッシュカード大のプラスチックのカードだった。

「これ、何？」

カズマが訊ねると、ユキノは彼にクルリと背を向けて言った。

「札幌のホテルのルームキー。明日配られる予定のぶんだよ」

カズマは手の中のカードを凝視した。

これって……？

「私とマヒロ、二人部屋のカードキー。暗証番号は0722にセツトしておくから」

「ちょっと待てよ。おまえ、どうすんだよ」

「私、札幌の夜はマリカたちの部屋に行くことにしたから」

カズマは潮風になびくユキノの茶色いロングヘアと、手渡されたカードを交互に見比べた。

「ユキノ……お前……」

「マヒロには何も言っていないけど……。でもたぶんあの子も望んでると思うから」

ユキノは背を向けたまま言った。声が僅かに震えている。

「……サンキュ、ユキノ」

「0722だからね」

念を押すように暗証番号を繰り返すと、ユキノは長い髪で顔を隠すようにしてカズマの横をすり抜け、リクの所に戻って行った。

自由行動の日の天気は、カズマの心を映したように晴れ渡っていた。教師のくどいほどの注意事項が終わり、解散宣言が申し渡されると、生徒たちはクモの子を散らすように札幌の街へと飛び出して行った。

人目を避けるように落ち合ったカズマとマヒロは、札幌駅の片隅で額を寄せ合ってガイドブックをめくった。札幌市内はたぶんどこを回っても誰かしらに会ってしまう気がする。

「高速バスで一時間くらいなんだけど、小樽まで行ってみない？」

自由行動の名目は、札幌市内観光と限定されていたが、別にどこに立ち寄ったかなど、一人ひとりチェックされているわけでもない。カズマはマヒロの手を引いて、札幌駅のバスターミナルを探した。いいタイミングで到着したバスには、カズマとマヒロ以外の学生は居なかった。

「昨日、ガイドブックで調べたんだ。快速エアポートで三十分くらいだから、もし小樽へ行く奴らが居るとすれば、大抵そっちを使うだろうと思って」

二人は後方の座席に並んで座った。半分ほど空席を残した状態でバスは発車した。窓際の席に座って札幌の街並みを眺めているマヒロの手を、カズマはそつと握り締めた。

マヒロはリラックスした笑顔で振り向くと、握られた手を解いて、かわりに指を絡ませるようにして繋ぎ直した。普段の彼女からは想像もつかない積極的な意思表示に、カズマの心臓がドキドキした。二人きりになれる行き先を選んで正解だったと、カズマは嬉しくなった。

手をつないだまま、二人でどこに行こうか相談するのは、舞い上がるほど楽しい。いつも人目を気にして怯えたような目をしているマヒロが、終始笑顔を見せている。それが、自分だけに向けられているのだと思うと、満足感と共に、カズマの心に危険な錯覚を起こさせた。

オレの……マヒロ。

カズマはポケットに手を入れた。指先に冷たくて硬いものが触れる。ユキノから手渡されたホテルのカードキー。カズマの意識の半分は、この時点からすでに夜の中へとさまよい出していた。

JR小樽駅に到着した二人は、小樽の主要観光地を十五分間隔で周回している『散策バス』のフリーパスを買った。一日乗り放題で750円とお得なチケットだ。赤い車体のバス「ろまん号」に揺られて、小樽運河沿いの北一ヴェネツィア美術館に立ち寄った。

白亜の建物は、中世ヨーロッパの宮殿を模したものだという説明があった。

「そういえば、おまえんちもヨーロッパ風のすげえお屋敷だよな」美術館を見上げながら何気なく口に出して、カズマはハツとした隣を歩くマヒロの表情が曇る。

「うちに、来たんだ……」

ウソをついても仕方がないので、カズマは何でもない事のように軽い調子で言った。

「ああ、前にね。頭ケガさせちまった日だよ。ちっさいジジイが出てきて、門の前で追い払われた。犬じゃねえんだから」

自虐ネタに「ハハハ」と笑うカズマを見て、マヒロはポツリと言った。

「大きい家ってね、寒いんだよ」

——体が？ 心が？ それとも、両方？

カズマは小柄なマヒロを見下ろした。彼女の華奢な肩に手を回して、ギュツと引き寄せる。胸にもたれかかるマヒロの重みとやわらかさを意識しながら、カズマはさざ波の立つ小樽運河に目を向けた。右手の先にレンガ造りの橋がかかっていて、観光客の流れがそちらに向かっている。運河からの風が、マヒロの柔らかい髪を弄んでは吹き過ぎる。肌寒くて少し湿った風を感じながら、マヒロの家には、きつとこんな風が吹いているに違いないとカズマは思った。

広いけれど、淋しくて暗くて寒い、マヒロの鳥かご……。

運河沿い、人の流れに沿って行くと、北一硝子の工房がある。こ

こちらは明治時代に建てられた建築物で、元々は倉庫だったという説明書きがあった。灰色の、レンガのような石を積み上げた壁が、時の流れを感じさせる。

二人は、工房内の体験コーナーに立ち寄ってみた。

「うわあ、かわいい」

マヒロが目を輝かせる。手にとったのは、カラフルなガラス玉をつないだアクセサリーだ。とんぼ玉というらしい。ヴェネツィア美術館のほうは、高価なクリスタルを扱っているので壊したら大変だと、どこか緊張気味にしていたマヒロだったが、こちらは庶民的な価格で手づくり体験もできるようだ。

「作ってみますか？ 携帯ストラップなら、千円くらいからできますよ」

ペアでいかがですか？ と係員の女性にニツコリされて、二人して顔を見合わせた。マヒロの顔が赤く色づいているのを見て、カズマもドキドキした。他人から見たら、やっぱり恋人同士に見えるんだと思うと、照れくさいけれど嬉しい。

結局、女性の言葉に乗せられて、二人でとんぼ玉作りに参加した。二十分ほどで簡単に出来上がった作品は、カズマは携帯ストラップ、マヒロはブレスレットだった。

「おそろいだね」

ブレスレットを手首にはめて、マヒロが微笑む。使用したパーツはまったく同じ色、形のものだから、さりげなくおそろい仕様になっているのだ。

運河沿いを並んで歩く。マヒロの髪が風にもてあそばれ、ほっそりとした首筋があらわになった。そこに赤い痣を見つけて、カズマは息を飲む。マヒロはカズマの目の中に何かを見てとったようだった。さりげなく襟元を直す彼女の腕で、とんぼ玉がやけにきらびやかに光る。

「空が高いね」

何かをごまかすようにそう言って、振り向いたマヒロを、カズマ

は思わず抱きしめていた。観光客の目があるということにはわかって
いた。でも、小鳥が空高く飛んで行ってしまいそうな、そんな不安
がカズマの胸をつまらせる。こんなに近くにある笑顔が、自分だけ
のものになることはないのだと、首筋の赤い痣が雄弁に語る。

「マヒロ……、オレさあ」

抱きたい。マヒロをオレだけのものにしたい。あの痣を消して、
自分の所有印をマヒロの体全部に刻みたい。

マヒロは困ったように何度も身じろぎしていたが、やがて観念し
て大人しくなった。マヒロはなだめるようにカズマの背中を何度も
何度も優しく撫でる。その指先の動きすらが、カズマにとっては切
なかった。

その後、観光バスを足代わりにして、二人は一日中小樽めぐりを
楽しんだ。夕食は札幌でラーメンを食べる事に決めていたので、川
風が冷たくなる前に小樽を出た。

札幌ラーメン横丁の狭い路地で、リクたち野球部集団とばったり
会ってしまった。カズマとマヒロ、慣れぬツーショットを見て、
他の野球部員が騒ぎ出す前に、リクはニコニコ笑って言った。

「カズマ、ご苦労だったな。マヒロが迷子になってるってユキノが
探してけど、お前、手伝ってやったのか？」

カズマは一瞬キョトンとしたが、リクが気を使ってくれたのだと
察して言った。

「あ……ああ、そこで会ったから、メシ食ってこうって話になって」
カズマの背中に隠れるようにして小さくなっている、地味な少女
に興味を無くしたように、他の野球部メンバーは目的のラーメン店
へと入って行った。

「リク！」

カズマの呼びかけにチュツと投げキッスのまね事を見ると、リク
はひらひら手を振って野球部メンバーの入って行った店に消えた。
人目のある札幌に戻ってきてしまったのだという事を肝に銘じて、
二人はやや早めに宿泊先のホテルに戻った。

今夜の宿は駅前のビジネスホテルなので、全ての生徒がツインルームに二人ずつ割り振られている。ロビーに集められた生徒たちは、クラス委員から部屋のカードキーを渡された。

カズマは、無意識にポケットの中のもう一つのカードキーを握り締めた。今日一日、マヒロとデートしている間中、カードキーの事を正直に言おうか言うまいかと悩んでいた。マヒロの気持ちを尊重しなければいけないと思った。キチンと話をして、拒絶されたら素直に引き下がろうと、始めはそう考えていた。でも、あの首筋のキスマークを目にした時点で、カズマは口をつぐんだ。

今夜を逃したら、二度とマヒロに触れるチャンスは無い。彼女の気持ちをハッキリ確かめるのも、もう今夜しかないのだ。明日の昼には飛行機に乗って羽田に着く予定だと、担当の教師がスケジュールを確認しながら言った。前に立つ教師たちは心労のためか、かなり疲れた様子だった。今日の自由行動で問題が起きるのではないかとハラハラしていたのだらうと思い、カズマは教師たちが少々気の毒になった。

オリエンテーションが終わり、生徒たちはそれぞれの部屋に引き揚げた。ここはビジネスホテルなので大浴場が無い。同室の男子生徒に断りを入れて、先にシャワーを浴びていると、カズマの部屋にリクが乱入してきた。

「カズマ〜！ 来てやったぞ！」

使用中のバスルームのドアを無遠慮に全開にされたので、カズマはリクの頭にシャワーの湯をお見舞いしてやった。

シャワーを済ませてバスルームを出ると、びしょ濡れのリクがくつろいだ様子で床に座ってテレビを見ていた。

「あれ？ タナカは？」

リクはベッドの上に置いた自分の荷物一式を指さして言った。

「部屋、代わってもらったんだ」

「え……？」

問題発生だった。一晚中部屋を開けるつもりでいるカズマは、同

室のタナカには「リクの部屋で寝るから」と言うつもりでいたのだ。
「修学旅行最後の夜だぜ。菓子いっぱい買ってきたから食おう」

そう言ってリクは「白い恋人」の包みをバリバリと破き始めた。

「お前、それ土産じゃねーの？」

少々引きつった笑顔を貼り付けて、カズマは渋々リクの隣に腰を下ろした。

深夜のバラエティ番組を見ながら携帯のデジタル時計を気にしているカズマに、リクはため息をつくと言った。

「やっぱ、ダチよりオンナだよな」

リクは坊主頭をポリポリと掻きながら犬猫を追い払うようにシッシツと手を振った。

「なんだよ、いきなり」

カズマはドキドキしながらリクを横目で見た。リクはベッドに這い上がるとゴロリと横になって言った。

「ユキノの厚意が無駄になっちまうもんな」

リクの言葉に、カズマは目をみはった。

「お前、知ってたの？」

「ああ、だけどな、オレはあんまり感心しないよ、そういうの。マヒロは人妻だ。これは間違いなく『不倫』ってやつだ。友だちが人の道を外れるところを黙って見てるのはいけない事だっと思った」
カズマはうなだれて膝を抱えた。リクの言う事は、全く、一部の隙も無く正しいと思った。無言になってしまったカズマに、リクは反動をつけて起き上がるとベッドサイドのメモ用紙に何かをさらさらと書きつけた。

「だけど、こんな言葉もある。『犯^ややらないで後悔するより、犯^やつて後悔しろ』」

メモ用紙を見てカズマはプツと吹き出した。

「お前、明らかに字が違うぞ」

「違うもんか。今夜のおまえにや、ピッタリの言葉だろうが!」

「うるせ」

リクは自分の携帯にちらりと目を走らせると言った。

「もう大丈夫かな」

「なにが？」

問い返すカズマに、リクは真顔で言った。

「カズマのことだからさ、たぶんテンパっちゃって、見回りのことなんか気にしてないだろうと思ってさ」

カズマはなぜリクがわざわざ部屋を変えてまで自分のそばにいてくれたのか、その理由に初めて気づいた。ニヤリと笑うリクの坊主頭をぐるぐると撫で回し、カズマはポケットのカードキーを確認すると音を立てないようにドアを開けて廊下を覗いた。背後でリクがボソボソと言った。

「オレ思っただけどさ、つくづく女って何考えてるのかわからない生き物だよな……」

この時のリクの言葉は、何故かカズマの頭の隅にいつまでも残る事となるのだが、今のカズマには知る由もなかった。

カズマは階段を使って女子が泊まっている五階へと移動した。消灯をとくに過ぎており、非常灯の薄青い灯りだけがボウツと長い廊下を照らしている。リクの情報どおり、今の時間帯はもう見回りの教師も居なかった。

カズマは渡されたカードキーを取り出すと、薄暗い光で部屋番号を確認した。何だか泥棒に入るような後ろめたい気分になってきて、心拍数が有り得ないくらいに跳ね上がった。扉についているスキヤン式のロックにカードをスラッシュさせ、暗証番号を入力すると、小さなランプが緑になった。震える手で素早くドアを開けると、カズマは部屋の中に滑り込んだ。カチツと小さな音がして、ドアがオートで施錠される。

「ユキノちゃん？」

急に声がして、カズマは飛び上がりそうになってしまった。ベッドサイドの小さな灯りが点灯して、学校ジャージで寝ていたマヒロ

が体を起こした。

「マヒロ、オレだよ」

囁くように声をかけると、マヒロは「ヒッ！」と引きつったような声を出した。彼女は無意識に毛布を首の辺りまで引きずり上げると、ようやく声を絞り出した。

「桃井くん、ど、どうして……！」

カズマはゆっくりとマヒロのベッドに近付いた。驚かせないように、小声で言う。

「ユキノに、キーを借りた」

マヒロは信じられないという目でカズマを見上げて、ひたすらゆるゆると首を振っている。カズマはベッドの側に跪いて囁いた。

「今日一日中マヒロと一緒に居たくせに、オレ、それでも足りなくて……。今夜もお前と一緒に居たい」

カズマはそろそろ手を伸ばしてマヒロの小さな手を取った。マヒロの体が大きく震える。言葉も出ないほどに驚愕した顔で、マヒロはカズマの手から自分の手を引き抜こうと力をこめる。カズマはぐいとマヒロを引き寄せた。怖がらせないように、ひとことずつゆっくりと言う。

「マヒロが好きだ。一緒に居たい。一緒に居られるの、今夜だけだから……」

カズマは大切な物を扱うように、マヒロの指先一本一本にそっと口づけた。

「……カズマ……くん」

薄暗い間接照明の光の中、初めて名前で呼んでくれたマヒロは、そっとカズマの手を握り返してきた。

カズマはマヒロの顔を見上げた。彼女の表情は言葉では言い表せないものを湛えていたが、カズマは無視した。

「今、オレの手、握り返してくれたの、それがお前の答えだって……受け入れてくれたんだって、勝手に解釈するからな」

最後まで何も言わないマヒロにもどかしい思いを募らせながらも、

カズマは性急な動作で彼女のベッドに乗り上げた。巻きつけられた毛布を剥ぎ取って、華奢な体を抱きしめる。彼女の上着のジッパーを下げると、Ｔシャツの襟ぐりから首に赤い痣が見えた。カズマの中に、どこか凶暴な意識が目覚める。カズマはその痣を覆うように手のひらでマヒロの首を押さえた。マヒロが悲しげな眼で見上げている。

こんなこと、いいのだろうか。

ほんの少しの背徳感のようなものが芽生えかけたが、あえてそれを意識しないように、カズマは彼女の小さな唇にキスした。やわらかい唇の感触に、あつというまに気持ちが持ってかれる。もう、何も考えられなかった。首に触れているカズマの手に、マヒロの手がそつと重なる。その手首にとんぼ玉があった。

間接照明の下で、じつと見つめ合ったあと、どちらからともなく唇が触れ合い、後は流されるままに求めるだけだった。

マヒロはカズマを拒まなかった。感極まったように乱れて、少しだけ泣きはしたけれども。

昂ぶった激情の波が去ると、カズマはマヒロを抱きしめてトロトロと浅い眠りに落ちていった。

どのくらいそうしていたのだろう。大きな物音に、二人はビクツとして目が覚めた。

薄暗い間接照明の明かりの中に、仁王立ちする人物を見て、マヒロが大きく息を飲んだ。

震える唇でその名前を絞り出す。

「北斗さん……！」

カズマは目を瞬いた。なぜここに居るはずの無い人物が居るのだ？ 薄暗い中で、彼の表情は良く見えない。

「……二人とも服を着ろ。見苦しいぞ」

北斗は無機質な声で言って、一旦部屋から出て行った。カズマはベッドから転がり落ちるようにして、慌ててジャージを身につけた

が、マヒロは毛布で体を隠したまま放心状態で座り込んでいた。視線は、北斗が出て行ったほうへ向けられたままだ。何と声をかけたらよいのか思いつかず、カズマはマヒロを残して部屋を出た。

暗い廊下に腕組みをして立つ北斗の背後に目をやったとき、カズマは初めて全ての事態を把握した。

「ユキノ……なんで？」

ユキノは俯いたまま携帯を握り締めて立っていた。カズマの視線を追うように、北斗はユキノに向き直ると言った。

「ユキノ、お前はいつたい、何をやっているんだ？」

「だって、だってあたしは……」

ユキノの声が震えている。

「もういい、行け」

北斗はユキノに向って冷たく言うところりと背を向けた。表情を失くした顔が再びカズマに向けられると、その背後でユキノが何か言いかけて、思い直したように口をつぐんだ。ユキノはカズマを見もせず滑るように廊下を走って、二つ先のドアへと消えた。

呆然としたまま閉じられたドアを見つめていると、北斗が感情の無い声で言った。

「もう……終わりだ。さっさと自分の部屋に帰れ」

殴られるのを覚悟していたのに、意外にも静かに言われてカズマは我に返った。マヒロの部屋のキーを操作する北斗に、カズマは低い声で訊ねた。

「これからマヒロに暴力を振るうのか？」

北斗は怪訝そうな顔でカズマを振り返ったが、何も言わなかった。カズマはその場に土下座すると、額を廊下にこすりつけるようにして言った。

「頼む、マヒロを傷つけたりしないでくれ。オレはいくら殴られてもいいから。彼女には手を出さないでくれ」

北斗がドアを開ける気配がして、冷たい声が降ってきた。

「静かにしろ。私には時間が無い。このままマヒロを連れて帰らな

ければならないから、今ココでお前と話している暇は無い」

ボタンと大きな音でドアが閉まると、気配に気付いたのか、近くの部屋から話し声が聞こえて来た。カズマは大急ぎで階段を降りて自分の部屋へと引きあげた。

かこの扉

あの日札幌に現れた北斗氏は、教師に断りを入れると、深夜にもかかわらずマヒロをさらうようにして東京へ連れ帰ってしまった。

「何かあったら法的措置を取る」と息巻いていたが未だになんの沙汰もない。修学旅行から四日経っているが、マヒロはずっと欠席している。マヒロはきつとあの屋敷の中に居るのだろう。ただ、ハッキリ言えるのは、今現在に於いて、北斗氏に暴力を振るわれる心配は無いということだ。

昼休み、カズマは一人で図書館の中二階に来ていた。美術書の並ぶ本棚にもたれかかり、登校途中で購入したスポーツ新聞を広げた。

《美人代議士 黒い金脈の流れ》

《イケメン秘書 獄中からの激白！》

一面トップは三日前からずっと同じ事件の記事だった。大写しになっている端正な顔の男性は、メガネをかけた目元に濃い疲労の色を浮かべていた。

事件の内容は概ねこんな事だった。

歯科医師会からの不透明な金の流れが明るみに出て、北斗の上司である女性代議士が槍玉に挙げられた。彼女は全ての責任を秘書の北斗に押し付けた。そのせいで北斗はただ一人拘束されて取調べを受けているのだった。歯科医師会というからには、マヒロの実家も関係があるのだろうと思われた。

記事の内容は日を追うごとに明らかになっていったが、カズマにとってそんな事はどうでもよかった。カズマは新聞をたたんでホコリだらけの床に放り出した。窓から差し込む暖かな日差しの中に、無数の塵が雪のように舞った。

「マヒロを籠の鳥のように閉じ込めていたのに、自分が拘束されてりゃ、世話ねーじゃん」

つぶやいてはみたものの、カズマの心の中は釈然とせぬままだった

た。トカゲがしつぽを切り落とすように、一人罪を被せられている北斗氏に対して、気の毒だとは思うが、だからと言って、未だにまったく好感は持てそうも無い。けれども、あの夜の彼の態度は、何故かカズマの胸の奥底を揺さぶった。

——もう……終わりだ

札幌の自由行動をマヒロと共に過ごすユキノにしゃべったのは、前日の午前中だ。ユキノからは逐一報告が行っていた筈だから、本当に二人の行動を阻止しようとする気があるならば、もっと早く来ればよかっただろうに。本人が来られなくても、人を使ってどうにかする事も出来たはずだ。

いや、もっと腑に落ちないのはユキノの行動だ。北斗氏からマヒロの素行を監視するよう頼まれていたのに、なぜ自分とマヒロを煽るようなことをしたのだろう？

まさかと思うが、振られた腹いせに面白がつて……？

いや、そんなはずはない。ユキノはそんなことをするようなヤツじゃない。だいたい、ユキノがマヒロと自分の監視役だったということ自体、いまだに信じられない。本人に確かめたいのだが、ユキノはあからさまにカズマを避けていて、目を合わせようとはしない。周囲にはいつもクラスメイトをはべらせており、まったくこみいった話などできる状態ではなかった。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。カズマは午後の授業をサボって例の金網の切れ目から学校を抜け出した。澄み渡った秋の空は見た目には爽やかだったが、肌を感じる風は日ごとに冷たさを増している事にふつと気付いた。

黄色と茶色の落ち葉が敷き詰められた歩道を歩き、一番近いバス停からバスに乗った。行き先は『丘の上近代美術館』。本当は電車を利用した方が早くて料金も割安だが、今は何だかバスに乗りたいたい気分だった。

三十分ほど揺られて目的のバス停で下車した。緩やかな坂道を歩くと、すぐに周囲は高級住宅街になる。景観を意識した電柱のない

街並みをぶらぶら歩くと、穏やかな午後の空気がカズマを包んだ。何だかこの街は空気さえもひと味違う気がするの、ハイソな人々に対する自分のひがみだろうか。

一步角を曲がった途端、穏やかな空気は霧散した。青い尖塔付きの屋根の住宅前に、大勢の人々が詰め掛けていた。路肩には何台もの車が連なつて駐車しており、門前には望遠レンズ付きのカメラが設置され、数人のカメラマンやリポーターらしき人がヨーロッパ風の建物を見上げていた。

誰でもいいから、何か新しいネタは無いのかと目をぎらつかせている彼らの様子は、獲物に群がるハゲタカを連想させた。マヒロ……。

籠の鳥の新たな敵たちに背を向けて、カズマは元来た道を引き返した。

学校へ戻る気にもならず、かといって家に帰るのは早すぎた。カズマは繁華街のキャバクラ「スマイル」に足を向けた。まだ時間は早いが、店長のツヨシはいつも午後三時過ぎには事務所に居る事が多かったので、期待して訪ねてみた。

「なんだこんな時間に。サボリか？」

咎めるような口調だったが、ツヨシの目は優しくそうに微笑んでいた。時間が早いので、彼はグレーの長丁にダメージ加工のジーンズ姿だ。スーツ姿に見慣れていたので、普段着のツヨシはどこか新鮮な感じがする。

ふと事務机を見ると新聞が何誌も乗っている。カズマの視線に気が付き、ツヨシは一番上に乗っている新聞を手を取った。

「いつかはこうなるんじゃないかって、本人も言っていたんだよね」ツヨシの言葉に、カズマは目線を彼の整った顔へと戻した。

「オレじゃ力になれないのかって尋ねたら、店で息抜きさせてくれたから十分だって。まあ、オレに出来る事といえば、実際そのくらいだったしな」

カズマは再びツヨシの手の中の新聞を見た。ちよいと色気のあり

そんな女性の背後に、影のように立つ北斗の写真が載っている。

「……アイツ、どうなるの？」

「うーん、洗いざらいぶちまければ、保釈金を払ってあとは裁判とかかな。ただ、もう今までのような暮らしは出来ないだろうし、判決の内容によっては服役もあるのかなあ。よくわからないけどね」

ツヨシは立ったまま事務机の上を片付け始めた。なんとなく落ちつきのないその仕草は、彼らしくないとカズマは思った。ツヨシも北斗の逮捕に思いのほか心を痛めているのだろう。新聞と共に愛用のジッポが床に落ちる。カズマはかgandoそれを拾い上げた。

「あ、サンキュ」

片手を差し出すツヨシに、カズマは上目づかいで言った。

「ねえ、これ、ちょうだい」

ツヨシはやれやれと言いたげな目で見てから首を横にふると、カズマの手の中から銀のジッポを取り上げた。

「お前にやったら、未成年の喫煙を奨励するみたいだろ。それにこれ、人からもらった物だし。悪いな」

しゃがんだまま恨めしげに見上げるカズマに向かって、ツヨシは手の中でジッポを弄びながら言った。

「おまえ、相変わらず、人のモノを欲しがるんだな」

そんなことはないけど……と語尾を濁し、カズマは立ち上がった。ツヨシの、見透かしたような視線を感じて顔をそむけながら、それでも聞きたかったことを恐る恐るたずねてみる。

「……マヒロは、どうなるんだろう」

ほんの少しの沈黙のあと、ツヨシは事務机の片付けを再開しながら言った。

「奥さんに印鑑押した離婚届を渡したって、聞いてるけど」

「……え？」

ツヨシの言葉にカズマは勢い良く顔を上げた。

「もともと、好きで結婚したわけじゃないし、奥さんはまだ十七だから、自由にしてやりたいって、酔っ払ってアユミに言ったそうだ」

十日ほど前のことかな、とツヨシは付け加えた。彼はデスクの片付けを終えると、店に続くドアから静かに出て行った。

——もう……終わりだ

北斗氏の言葉は、カズマとマヒロのことではなくて、自分とマヒロの事だったのだろうか。カズマは黙り込んだまま近くのパイプ椅子に腰掛けた。十日前と言えば、修学旅行の直前くらいだろう。マヒロは離婚届をもう出したのだろうか。離婚していたから、マヒロは黙ってカズマに抱かれたのだろうか。修学旅行の時のマヒロの笑顔を思い出す。

あのときすでに籠の扉は開けられていたのか……？

カズマはキャバクラを出ると、歩いて数分のところにあるマヒロの実家、三井デantalクリニクを訪ねる事にした。マヒロが離婚をしたのかしないのか、それだけが知りたかった。

三井デantalクリニクは「休診」の札が下がっていた。きつとマスコミがうるさいので、営業できないのかもしれない。カズマは周囲を見回した。北斗の屋敷と違って、ここにはマスコミ関係者と思われる人の姿は見当たらなかった。

カズマは大きな看板を見上げながら、正面のインターフォンを押した。期待していなかったが、やはり返事はない。仕方がないので、今度は裏へ回ってみた。裏門もしっかりと施錠されていて、在宅しているのかどうか判断がつかない。諦めかけて再び表へ回ったとき、夕暮れの道を少年が歩いてくるのが見えた。

「あ……おにいちゃん」

マヒロの弟は、カズマを見るとニコツと笑って仔犬のように走ってきた。

「この前はごちそうさまでした」

礼儀正しく挨拶をする弟に、カズマは頼みごとをした。

「マヒロのことで話があるんだけど、お母さんに会わせてもらえないかなあ」

弟は何か面白い事でも見つけたような顔になり「任せて」と言っ

て裏口から家の中に消えた。

十分ほど待たされた後、裏口から小柄な中年女性が顔を出した。怯えたような表情が、マヒロに瓜二つだ。

「マスコミの方じゃ、ありませんよね？」

念を押すように言う女性の背後から、弟が大きな声で言った。

「このおにいちゃんは大丈夫だよ。だって、マヒロお姉ちゃんの学校のマークつけてるじゃん」

カズマはドキリとして胸元に手をやった。少々弛んでいるが、ネクタイをしていて良かったと、ホッと息を吐く。

ようやく家の中に入れてもらえたカズマは、リビングに通されるのも待ち切れず、早速質問しようとした。

「あのっ、マヒロさんは……」

ところが、カズマの言葉は母親によって遮られた。

「マヒロ、元気に学校へ行ってるんでしょっか？」

「え？」

母親の問いにカズマは首をかしげた。

「学校には来てません。修学旅行以来ずっと欠席してます」

「そうですか。携帯電話がつかないの、様子がわからないものですから」

「携帯は壊れたそうです」

もしかしたら北斗に取り上げられているのかもしれないけれど、とカズマは胸の中で付け加えた。

「マヒロ……」

娘の名前をつぶやいたつきりで、母親は俯いて黙り込んでしまった。マヒロは誰とも連絡を取っていないのだろうか。カズマがため息をついた時、母親が言った。

「北斗の家からだマスコミがうるさいから、別のところに移って、そこから学校へ行くという連絡があっただんですけど……あれは公衆電話からだっただんですね、たぶん……」

思いがけない情報に、カズマは小柄な母親を見て言った。

「マヒロはあの家に居ないんですか？　いったいどこに？」

すると、母親の背中からひょっこりと顔をのぞかせて、弟が言った。

「ボク知ってるよ。Y駅の裏にあるビジネスインっていうホテル。さっきぼくのケータイにメールがあつたんだ。ネットカフェから送信したみたい」

マヒロの弟はどこか楽しそうにぺらぺらとしゃべる。

「お母さん、マヒロお姉ちゃんにお金渡したいって言ってたけど、これから行くの？　ぼくが行ってあげようか？」

そのとき来客を告げるインターフォンが鳴った。マヒロの母親は険しい顔になると、背後でウロウロしている弟をヒステリックに怒鳴りつけた。

「二階へ上がっていなさい。ぜったい応答してはダメよ！　それから電気をつけるときはカーテンをきつちりと引きなさい」

母親は物音を立てないようにリビングの窓から表を覗いていたが、「あの……こんな事お願いをするのは心苦しいのですが、私は今、表を歩く事が出来ないんです。だから、これをマヒロに渡してやっていただけないでしょうか」

そう言っ手渡されたのは、銀行のマークが入った分厚い封筒だった。

「え、ぼくが……ですか？」

「お願いします。どうかマヒロに」

「お、お金なんて、預かるわけには……」

慌てて断ろうとするカズマに、マヒロの母親は縋りついた。

「あの子きつと、一人で困っていると思うんです。今、私が親として出来ることはこれくらいしかないんです。お願いします」

カズマは渋々承知すると一応訊いてみた。

「マヒロさん、北斗の家を出るにあたって、何か言っていましたか？」

「……その、離婚とかそういうの……」

「いいえ、何も……」

母親の表情は怪訝そうだった。うそをついているとも思えない。マヒロは誰にも言っていないのだろうか。

外はすっかり暗くなっていた。闇に紛れて裏口から出てゆくカズマに、マヒロの母親は何度も頭を下げて言った。

「近いうちに必ず会いに行くと……。連絡待ってる」と伝えてください」

マヒロの居場所はわかったし、会いに行く口実も出来た。カズマは三井デンタルクリニックの裏手の路地を抜け、Y駅に向かって足を速めた。しかし、カズマの足どりはY駅に近付くにつれて重くなっていた。

数々の疑問が浮かんでは消えてゆく。籠から自由になったマヒロは、離婚届を出したのだろうか。マヒロが離婚届を出していたとしたら、何故彼女はその事を言ってくれなかったのだろうか。それともまだ出していないのだろうか。……。何故？　こんな事態になっているというのに、何故、マヒロは自分に連絡をくれなかったのだろうか。学生だから？　頼りないから？　……。そもそもマヒロにとって自分はいったい何なのだろう？

——オレ思っただけだし、つくづく女って何考えてるのかわからない生き物だよな……

いつ、どんなタイミングで聞いたのかは忘れてしまったが、リクの言ったこの言葉が、カズマの頭の中に大きく響いていた。

金を預かってしまった以上、実会うのが怖いなどとは言っていない。金預けなかった。

カズマはY駅の裏手にあるビジネスホテルのフロントでマヒロを呼び出してもらったが、彼女は不在だった。料金の精算はされていないとの事だったので、カズマはそのまま狭いロビーのソファに座って彼女を待つことにした。フロント係の青年が、気を使ってテレビのスイッチを入れてくれたので、カズマは見るともなしに画面を眺めた。

午後六時の時報と共にニュース番組が始まった。

『マドンナ議員　逮捕へ！』
始まると同時にテロップが流れ、女性アナウンサーの声が本日の特ダネを告げる。

秘書の男性の証言によって調査した所、歯科医師会から女性議員への不透明な金の流れを記録したデータと、彼女が直接指示を出していたという証拠が見つかった、とのことだった。

あの男は、少しは罪が軽くなるのかな……

髪を振り乱して喚き散らす女性議員の映像をぼんやりと眺めながら、カズマは北斗氏の事を考えた。

テレビ画面が切り替わり、政治に詳しいどこかの大学教授がコメントを求められていた。

『いやあ、この事件は氷山の一角ですね。彼女の父親も祖父も代々政治家の家柄ですから。まだまだ過去に遡れば、何が出てくるやらですよ』

『でも、どうして今までわからなかったのですかねえ』

女性キャスターの質問に、大学教授は苦笑いした。

『それだけ結束が固かったのでしょうか。北斗家は代議士一家の補佐として抱え込まれていたようですし、優秀な人材を確保する役割を果たしてきたんですよ』

キャスターの女性が質問をした。

『では、先に逮捕されていた北斗氏はやはりその目的で養子に入ったのですか』

『そうです。彼の学歴は優秀ですから』

『そんな優秀な人物でも、失敗しちゃうんですねえ』

呑気な女性キャスターのコメントに、大学教授がうんざりするような目を向けたところでいきなりテレビが消えた。

一瞬何があったのかわからず固まっていると、背後で人の気配がした。

リモコンを手にしたマヒロが立っていた。

「……マヒロ」

マヒロは泣きそうな顔で、消えたテレビの画面を見つめていた。

「マヒロ……オ、オレさあ……」

何と声をかけたらよいかわからず、ゆらりと立ち上がったカズマに、「一緒にきて」とマヒロは小声で言った。

二人はホテルを出ると、近くのファミレスに入った。平日の夕方にも関わらず、店内は混雑している。少し待たされた後、窓際のボックス席に案内された。

夕食時だったが、マヒロがコーヒーしか頼まないの、カズマも同じものにした。

マヒロと顔を合わせるの、あの札幌のホテル以来だ。しかし、体を重ねた男女の再会にしては、何だか妙に空気が重い。カズマは向かいの席に座って俯くマヒロをじっと見た。ここ数日間で、彼女はずいぶんとやつれたように見える。

「マスコミが、うるさいのか？」

マヒロはコクンと頷いた。

「お前の実家にも、リポーターかなんかが来てた」

ハッと顔を上げたマヒロの鼻先に、カズマは彼女の母親から預かった、現金入りの封筒を差し出した。

「かあちゃんが、お前に渡してくれって」

マヒロは震える指先で封筒を受け取ると、中身を確認した。

「……お母さん、何か言ってた？」

「とても心配していた」と言つと、マヒロは声を殺して泣いた。

コーヒーが運ばれて来たので、彼女は白いセーターの袖口で懸命に涙を拭つと、ようやく落ち着きを取り戻した。

「……ごめんね」

カズマの顔を見ずに、マヒロは謝った。思えば彼女はいつも謝罪の言葉を口にしていたように思う。

「簡単に謝るな。おまえ、何にも悪い事、してねえだろ」

俯いたままのマヒロに、カズマは核心に触れるように言った。

「あの家出られて、よかったじゃないか。もう、北斗マヒロじゃない」

くて、三井マヒロに戻ったんだろう？」

マヒロはゆっくりと顔を上げて、カズマの目をじっと覗き込んだ。何だかいつもと違う思いつめたような眼差しにドキリとする。

マヒロは言った。

「私、やらなくっちゃいけないの」

「え？」

時が止まったように、二人の間に沈黙が降りてくる。マヒロは、なにをやらなければいけないのか。たずねようとすると、

「私じゃなきゃ、ダメなの」

マヒロはささやくような声で、それでもキツパリと言ってカズマを見つめる。その瞳の力に気圧されて、言葉を発しようとしていたカズマは口をつぐんだ。

マヒロはコーヒークップに目を落とし、重苦しく切り出した。

「私があの家を出たのは、やらなければならない事があると気付いたからなの」

カズマは黙ってマヒロの言葉を待った。とても大切な話を話そうとしているのが感じられて、無意識に心の中で身構える。

マヒロは脇に置いてあった紙袋の中から、編みかけの毛糸を取り出した。コバルトブルーの長いモノは、どうやらマフラーのようだった。

「以前に編み物してるって、メールしたの覚えてる？」

身構えていたカズマは、拍子抜けしてマヒロの手の中の毛糸を見つめた。

「本当に好きな人が出来たら、私、手編みのマフラーをプレゼントしようって、小さい頃から決めていたの」

カズマは、今度はドキドキしながらマヒロの顔を見た。

——家を出る。やりたいことがある。

そのマフラーはひよつとして、自分へのプレゼントかもしれないという期待に、胸の鼓動が高鳴る。……でも。

甘い展開を期待するには、やっぱりマヒロの態度がおかしい。ま

とっている空気が重い。

身構えたままマヒロの出方をうかがっていると、彼女は、今度は自分のバッグの中から封筒を取り出した。緊張気味に見ているカズマの目の前で、彼女は封筒の中身を取り出して自分だけに見えるように広げた。薄手の書類のようなそれを、じっと見つめたあと、マヒロはいきなりビリビリと破いた。

「……なに？ ソレ……」

ファミレスの茶色いテーブルの上に散らかされた紙片を見て、カズマの目が大きく見開かれた。

「これ、離婚届じゃん……！」

愕然とするカズマに、マヒロはコクンと頷くと言った。

「私、あの家を出て、一人で北斗さんの……夫の帰りを待つことに決めたの」

紙片に目を落としたまま、カズマは顔を上げることが出来ないでいた。いったいぜんたい、どうなっているのか。マヒロの行為の意味がわからない。そんなカズマの気持ちを知ってか知らずか、マヒロは青色のマフラーを手に取った。

「だから……ごめんなさい」

カズマはようやく顔を上げたが、相変わらず言葉は出ず、ただ果然として目の前の少女を見つめた。「ごめんなさい」の意味を必死で考える。何故？ どうして？

「ど、どうして……？」

ようやく声を絞り出したカズマに、マヒロは妙に吹っ切れた声で言った。

「私はいつも誰かに頼って生きてきた。未成年だから、それは仕方無い事だと思っていただけだ」

そういえば、以前も彼女が同じような事を言っていたのを思い出した。

——桃井くんにはわからない。誰かに依存するしかない、そんなお荷物みたいに暮らしてきた人間の気持ちは、絶対にわからない。

マヒロは破いた離婚届を一片も残さず丁寧にまとめて、元の封筒におさめた。カズマはただぼんやりとそれを見ているしかない。

マヒロは封筒を見つめているが、心はどこか別のところにあるようだった。しばらくして、彼女は唐突に話を再開した。

「父が亡くなったとき、養護施設へ行くという選択肢もあった。でも、自分には母親がいるから……別々の人生を歩んで来たからって、親ならきつと助けてくれるはずだと、そう思った」

でも、マヒロの思いは叶わなかった。以前聞いた話だ。

「落胆していたところに、縁談の話があつて、私は今度もそれにすがった」

自分のしたことが間違っていたとは思わない、とマヒロは言う。

「誰かに頼るのは、経済的には仕方の無い事だと思ったの。けど、心まで寄りかかるのは間違っているって、そう気付いた」

マヒロは大きな瞳でカズマを見つめて言った。

「それを教えてくれたのは、カズマくん、あなたなんだよ」

「え？ オレ？」

妙な成り行きに、カズマはキョトンとして、自分で自分を指さした。マヒロは大きく頷く。

「どうせ何もできないからって、存在しないフリで、透明人間みたいに生きてきたけど、やっぱり私はココに居る。そして、そんな私をいじめる人も居る。でも、助けてくれた人も居た」

マヒロはカズマの手を握手のように握ると言った。

「どこにいてもひとりぼっちで途方に暮れていた私にとって、カズマくんの存在はすごく心の支えになったんだよ。それで気付いたの。人は誰かを支えてあげることができるって」

「マヒロ……」

「自分にも、他人にも無関心ではいけない。北斗さんは今とても困っている。……どんな縁でも、結婚したのだから妻である私が支えてあげなくて、誰が彼を、って……」

マヒロはテーブルの上でつないだ自分とカズマの手をじっと見る。

「あの事件が発覚してから、誰も北斗さんと関わろうとしなくなつたみたい。当たり前なんだけど」

ひとりになるのはとても寂しいことなんだよ、とマヒロは言う。

「それって、同情って……言っんじゃないか？」

引きつった口元で、カズマは言葉を探す。マヒロの手はとても温かいのに、カズマはつないだ手のひらから自身の体温がぬけていくような気がしてきた。

マヒロはそんなカズマに切なげな眼差しで言った。

「同情……人から見たら、そうかもしれない。でも、北斗さんを何とかしてあげたいって思う強い気持ちを何て呼ぶのかは、私の心の申しだから……」

マヒロは握手した手にギュツと力を込める。

カズマはうつろな瞳で握られた手をじっと見つめていたが、名前を呼ばれて顔を上げた。目の前にまっすぐこちらを見るマヒロの瞳がある。怯えていたところは別人のような強い輝き。

「カズマくん……カズマくんの気持ち、嬉しかった。でも、私の思いを同情と呼ぶなら、たぶんカズマくんの思いもソレだったんじゃないのかな？」

「え？」

「カズマくんは、あの日、薄暗い歯医者の前で泣いてた女の子が、ただ可哀想になっただけなんだよ、……きっと」

「オレは、そんな」

うつん、とマヒロはかぶりをふる。

「カズマくんは優しいから。いじめられてる私を気の毒に思っただけなんだよ」

握っていた手が離れていった。

そんなことはないと言おうとしたが、言葉にならなかった。誰かのモノを欲しがるどうしようもないガキが、人妻のマヒロに興味を持った。そして彼女の孤独を知ったときどう感じたか。自分が守ってやらなければならないと思った。何とかしてやりたいと思った。それは間

違いないことだ。

でも、それを恋と呼ぶのかと問われれば、答えに窮する。そのことに気づいて、カズマは途方に暮れた。頭の中に、またもやあのリクの言葉が大音量で回りだす。

——オレ思っただけどさ、つくづく女って何考えてるのかわからない生き物だよな……

「ずるいよ、マヒロ……」

ぽつりとつぶやくと、「ごめんね」といつものように謝罪して、マヒロは席を立つ。

ファミレスを出て行く彼女の後ろ姿は、凜としていた。

最終話

数日後、マヒロが学校を休学することになったという知らせを担任から聞いた。その日を境に、彼女の姿を意外なところでちょくちょく目にするようになった。

マヒロは夫の為にマスコミを利用したようだった。しかし、利用したと知っているのはカズマだけだろう。マヒロがそんな大胆な事の出来る子だとは誰も思っていなかったので、ワイドショーで繰り返し放送される彼女の映像は、日本中の人々の同情を集めた。

『マヒロへ』

まだ幼い君を巻き込んでしまったことを許してください。政略結婚とはいえ、可愛いマヒロを妻にできたことは、僕にとつてなにより幸運でした。妹と歳のかわらぬ君に、夫としてどう接して良いかわからず、まるで保護者のように干渉したり友だちづきあいを制限して説教したり、時には僕の思いが空回りをして、手をあげてしまった事もありました。ほんとうに申し訳なかったと思います。素直に愛情表現ができない自分は、君を束縛することしか思いつきませんでした。こういう事情があろうとも、犯罪に加担してしまったからにはもう君の夫ではいられません。離婚届を提出して、自由に生きてください。籠の扉は開いています』

北斗氏直筆の手紙が紹介されたあと、画面の中のマヒロが声を震わせる。

「私は夫を信じています。彼はすすんで犯罪に加担したりしていません。夫は板挟みになって、とても苦しんでいました。良心を痛めていました。でも大きな力の前では、ああするしかかったのです。私も彼も、権力の被害者なんです」

破いた離婚届の入っている封筒と夫の手紙を握り締めて、はらは

らと涙を流す幼な妻の映像を携帯のワンセグで見ながらリクが言った。

「なんか、すげーな。マヒロが人前でこんなにすっかりとしゃべれるヤツだったことが、驚きだよ。おかげで北斗さんにすっごい弁護士がついたんだってさ。こっちの週刊誌に載ってるよ」

昼休み、校舎の屋上に寝転んで青空を見上げているカズマにリクが週刊誌を差し出した。それには、どこかに移送される北斗氏の写真が載っていた。彼の衿元にはマフラーが巻かれている。

「コバルトブルーのマフラーか……。ヨン様じゃねえっつの」

カズマのつぶやきに、リクが眉根を寄せた。

「白黒なのに、よく色がわかるな」

リクの疑問には答えず、カズマは週刊誌を放り出すとゆっくり目を閉じた。

ひんやりとした風に乗って、近くの幼稚園からお遊戯の唄が流れてくる。

かごめかごめ かごの中の鳥は
いついつ出やる 夜明けの晩に
鶴と亀がすべった 後ろの正面 誰？

「この歌詞、よく考えると意味不明だよな」

ぼつりとつぶやくカズマに、リクは憐れみとも同情ともつかぬ視線を向けると言った。

「大事に籠に入れている他人さまの鳥を、奪ってみた感想はどうよ？」

少々棘のあるセリフに、カズマは肩をすくめた。

「さあな」

追いかけたって、抱きしめたって、奪えないものがある。手に入れたと思っても、それは幻で、まばたきひとつの間にするりと逃げて行く。たぶん、マヒロに限ったことではないのだと思う。

籠の中の鳥は、結局籠から出なかった。いや、籠はマヒロ自身の心が纏まとっていたものだったのかもしれない。そして彼女は今、夫を籠から出してやるべく奔走している。

繰り返し聞こえるわらべ歌のワンフレーズを、カズマは小さく口ずさんだ。

「夜明けの晩に鶴と亀がすべった……」

夜明けは明日を予感させる希望に満ちた言葉なのに、晩と続くことでそれを否定している。永遠に明けそうでもない夜。長い夜の中で、おめでたいモノたちが滑り、落ちる。どこまでも、どこまでも……

『鶴と亀』って、誰だろう。そう考えて、ふとあの札幌の夜を思い出した。抱きしめたとき、なぜだか悲しげな目をしていたマヒロ。だからなのか？

カズマが告げたマヒロへの思い。それを『同情』だと彼女は言った。裏を返せば、黙って抱かれたのは、ひょっとして彼女の『同情』だったのだろうか？

リクが立ち上がる気配を感じてカズマは目を開けた。おもむろに身を起こし、ゆっくりと背後を振り返る。

——後ろの正面 誰？

茶色の髪をなびかせて、ユキノが立っていた。リクはユキノのそばに歩いてゆくとポンと肩を叩いて屋上から去ってゆく。

リクの姿が鉄扉の中へ消えると、ユキノは小さく舌打ちした。

「マリカが呼んでるって言ったのに……リクに騙された」

ユキノは空を仰いでぐうっと大きく伸びをすると、カズマのとなりに来て腰を下ろした。

何を話してよいのかわからず、カズマはリクの置いていった雑誌をアゴで示した。ユキノはうなずくと「知ってるよ」と言ってから付け加えた。

「だって、兄だもの」

「え？」

「北斗多一郎は私の兄なの。ちょうど今の私と同じ歳に北斗家の養子になったのよ」

その話はツヨシに聞いて知っていた。でも、知らなかった。まさか、ユキノが妹だったなんて……

カズマはようやく言葉を探し当てた。

「兄貴に頼まれたから仕方なかったんだろう？ ……その、見張り役」

ユキノの顔からふっと表情が消える。唇をゆがめて、彼女は言った。

「私が自分から申し出たのよ。そもそも、この学校に転校してきたのだって、兄さんの婚約者がどんな子なのか知りたかったからだもん」

そう言っ、ユキノはぽつりぽつりと話し始めた。

「兄さんが養子になると、北斗家から援助を受けて私たちの暮らし向きはずっと楽になった。兄さんは恩に報いるために一生懸命勉強して目標の大学に合格したの。養子に出たと言っても、学生のうちはよく実家に帰ってきて、普通の家族となんら変わることはなかったよ。……そう、幸せだった」

ユキノは胸の前で両膝を抱え、その上にアゴを乗せて小さくなった。何処か遠くを見ている眼差しは切なげだ。

「でも、卒業と同時に兄さんはふつりと姿を見せなくなった。心配で訪ねて行くと、『もう二度と会わない。兄は居なかったと思うてくれ』って言われたの」

「どうということ？」

「今を思うと、その時から今回の事件にかかわっていたのだろうって思う。……でも、そのときはわからなかった」

ユキノはきゅっと唇をかんだ。

「……音沙汰がないまま一年ほど経って、いきなりマヒロと結婚するという手紙が来たの。いったい兄さんはどうしちゃったのだろうって。私、心配で……それで」

ユキノの話を聞きながら、カズマはぼんやりと記憶をたどっていた。マヒロがいじめられるのはカズマの責任だと、ある日ユキノは教えてくれた。ユキノはマヒロに対してイジメを行っていたのだろうか。直接手を下さなくても、誰かを煽ってやらせていたのかも。隣に座るユキノを盗み見ると、彼女は抱えた膝の上に顔を伏せている。小刻みに震える肩。泣いている、そう思った。

「……だから私は、だから、この学校に転校してきたのよ。兄さんが変わってしまった原因は、もしかしたら結婚相手にあるんじゃないかって……」

そう、ユキノにとって、マヒロは兄の嫁だ。それなのに、なぜ……？

「なあ、ひとつだけ教えてくれよ」

感極まったようにしゃくりあげるユキノに、カズマは低い声でたずねた。

「お前は結局、オレとマヒロをどうしたかったんだ？」

ユキノはビクンと肩を震わせた。涙をぬぐい、ゆっくりと空を仰ぐ。カズマもつられて上を向く。青い空に、風が秋あかねをつれてくる。カズマの髪をかすめ、とんぼたちは群れて青空へ舞い上がる。その様子を眺めながら、ユキノがぼつりと言う。

「どうしたかったなんて、知らないわ」

「え……」

「マヒロはつまらない子よ。なのに、私から大事な人を奪った。兄さんだけじゃなく、カズマまで……それが許せなかった……」

ひどく醒めた口調。

「そんなことなのか？」

「……そんなことで？ たった、それだけのことで、マヒロを？」

カズマはまじまじとユキノを見つめる。彼女は顔にかかる長い茶髪をかきあげると、

「自分の行動に、あえて理由をつけるとすれば、ね」

そう言っただけで笑う。涙のあとが、もう乾き始めているのを

目にして、カズマの両腕がぞわりと粟立つ。初めてユキノにマヒロのことをたずねたときと同じく不快な感覚に支配されると、いつかリクの言っていた言葉が、再び頭のなかをぐるぐると回りはじめた。

——オレ思っただけどさ、つくづく女って何考えてるのかわからない生き物だよな……

初めからユキノはマヒロのことを快く思っていなかったのだろう。それなのに、自分はマヒロの保護を、あるうことがユキノに頼んだ。オレは、とんでもないバカだ……

ユキノに利用されたのだ。ユキノは兄を取り戻すために、マヒロとオレが寝るように仕組んだ……？

いや、でも。

そんなのは矛盾している。そこまでしなくても、他にいくらだって方法はあるはずだ。第一、北斗はそんなことを望んでいなかったはずだ。はつきり言っ、ユキノのしたことは、兄の心証を悪くしただけだろう。

「じゃあ、なぜ……？」

口をついて出たカズマの疑問にユキノが首をかしげる。彼女の顔をじつと見つめると、カードキーを渡されたときのことがありありと浮かんできた。何かを堪えるような、切なげなユキノの笑み。カードキーの暗証番号0722。あれは……

本当に、自分はとうしようもなくバカなのかもしれない。こんな話を聞かされてさえ、ユキノを悪く思うことができないう。あれは、純粹に自分とマヒロのためにしたことなのだと思えてならない。

「0722って……。あのときのカード番号……」

ユキノは黙ったままカズマの目を見つめる。

「オレの誕生日と同じだった」

ハッとしたように、ユキノの目が見開かれる。

「なにそれ？」

ユキノの声はわずかにうわずっている。その様子にかズマは確信

する。ユキノの中にあるのは悪意じゃない。では、好意？ それとも、愛情？ いや、どれも違う気がする。強いて言うならそう、たぶんそれは……

「同情、か？」

「同情？」

ユキノが形の良い眉をしかめる。カズマはユキノを見つめたまま言った。

「カードキーを渡したのは、叶わぬ思いを抱え込んで悶々としているバカな男に同情したから……だろ？」

……それとも、夫に愛されていないと思いこんでいる妻に対してか。

ユキノは音もなく立ち上がった。その横顔にはなんの表情も無い。「同情か……。そんなふうに思うんだね、カズマは」

「違うのか？」

ユキノは何も言わず踵を返して足早に離れて行った。

誰も居なくなった屋上で、カズマは再びごろりと寝ころんだ。空の深みに、数羽のすずめが飛びさる影を見た。

人の心の中なんて、わからない。わかりたくもない。自分の中にある思いを、なんて名づけるのかは、自分次第だと言った少女のことを思う。

「そついや、オレ、ふられたの初めてかも」

今ごろ気付いてカズマは苦笑した。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

「さてと、勉強するか！」

カズマは大きく伸びをして立ちあがると、遠くにかごめを聞きながら屋上を後にした。

(了)

最終話（後書き）

長いものをお読みくださいますと、どうもありがとうございます。
素人ゆえ、読みにくいところが多々あったかと思えますので、ご意見などいただけたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

冴木昂

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3047ba/>

かごめかごめかごのなかのマヒロ

2012年1月12日07時45分発行